

卒業論文

2015年1月30日提出

リスク状況下における「遊び」
—徳島県美波町阿部の防災活動を事例に—

徳島大学総合科学部社会創生学科地域創生コース

学籍番号：1011030888

山本貴大

指導教員：内藤直樹

目次

第一章	はじめに	1
第一節	研究概要	2
第二節	研究背景	2
第三節	研究目的	
第四節	研究方法	
第五節	調査対象・方法	
第二章	対象地域の概要	
第一節	阿部地域の概要	
第二節	昭和南海地震	
第一項	徳島県南部における昭和南海地震	
第二項	阿部地域における昭和南海地震	
第三節	小括：隠されていた「危険」	
第三章	露わになった「危険」	
第一節	南海トラフ新想定 of 経緯	
第一項	東日本大震災	
第二項	南海トラフ新想定	
第二節	南海トラフ新想定によるインパクト	
第三節	小括：潜在的「危険」から顕在的「危険」へ	
第四章	「危険」から「リスク」へ	
第一節	マイ避難路の概要	
第一項	マイ避難路の特性	
第二項	マイ避難路作成者	
第三項	作成者の思い	
第二節	外部アクターとの防災活動	
第三節	小括：「リスク化」での「遊び」	
第五章	高齢者による「遊び」としての日常的な防災活動	
第一節	グラウンドに集う人々	
第二節	各々の目的や背景	
第三節	活動内容	
第四節	小括：「遊び」としての防災活動	
第六章	まとめと考察	

第一節 まとめ.....

第二節 考察：災害リスクが生み出す公共空間.....

参考文献.....

参考 URL.....

謝辞.....

第一章 はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、東北地方と関東地方を中心に大きな被害が発生した。津波によって流される瓦礫や車、それらから逃れる人々、原発事故、過酷な避難所生活、テレビ越しに恐怖を感じ、同じ日本で起きている出来事とは信じられなかった。しかし、未曾有の大災害の1ヶ月後に大学に入学した後では、あまり意識することなく平凡な日々を過ごしていた。自分にはあまり関係のないことだと考えていたのかもしれない。それから1年後の大学2年次の時に、被災地である福島でのボランティア活動に参加する機会を頂いた。当時、東日本大震災からは1年以上経っており、ある程度は復興しているだろうと考えていた。しかし、被害のあった沿岸には瓦礫がそのまま残されており、亡くなった人たちを回収した箇所を示す赤い丸印がそこら中に残っているなど、「復興」が進んでいない様子を見て、愕然とした。こうした被災地の現状を知り、災害（主に津波）に興味を持つようになった筆者は、2012年度に徳島大学社会調査実習で、東日本大震災により見直された南海トラフ新想定に対処する地域の取り組みを調査した。以下、地域の自主防災活動に関する徳島新聞の記事を挙げる。

徳島県内の自主防災組織(自主防)の組織率が、初めて90%を突破したことが県のまとめで分かった。各自治体による地道な呼び掛けや啓発活動に加え、東日本大震災を受けた危機意識の高まりも背景にあるようだ。ただ、山間部では過疎化の進行で、自主防の基盤となる集落の活力が落ちており、組織づくりが難しくなっている現状も浮き彫りになった。県防災人材育成センターや市町村の防災担当者によると、各自治体で自主防の活動エリアに入っている世帯の割合を示す組織率は90.1%(4月1日現在、速報値)。前年より3.1ポイント増えた。全国平均は未集計。市町村別にみると、徳島、吉野川両市と勝浦、美波、海陽、松茂の各町で100%に達している。前年比で最も伸びが大きかったのは12.6ポイント増の東みよしで組織率は79.9%。11.4ポイント増、67.4%の北島、9.7ポイント増、61.0%の石井が続く。(『徳島新聞』2012.11.3朝刊)

この記事から分かるように、徳島県では自主防災組織の組織率が90%を超え、高い組織率となっている。その中でも、徳島市、吉野川市、勝浦町、海陽町、松茂町が100%となっている。実習時に筆者は、組織率100%の海陽町宍喰で調査を行った。宍喰は昔から津波被害を受けており、高い自主防災組織率を誇っている地域であるので、豊富な災害文化を活かした活発な防災活動が行われていると考えていた。しかし、実際には高い組織率の割に目立った活動は行われておらず、組織が存在することと、それが実効的に機能することとは別だということが分かった。東日本大震災という未曾有の大災害を目の当たりにし、同じような被害を受ける可能性のある地域にもかかわらず、南海トラフ新想定以降も進んでいない地域の防災活動に衝撃を受けた。しかし、今回調査を行った美波町阿部集落では住民による積極的な防災活動が行われていた。未曾有の災害リスク状況下において、彼らを動かした要因とは何だろうか。この疑問が本研究の出発点である。

第一節 研究概要

本研究は、東日本大震災の経験をふまえて提出された南海トラフ新想定によって露わになった「災害リスク」状況下に対処するために活発な防災活動を行う地域の活動に関する民族誌的記述をもとに、災害と社会の関係について考察する。そのために、南海トラフ新想定公表以降に創出されつつある防災組織や活動のあり方を「公共空間」という観点から検討する。その際、防災活動を創出・継続するために、日常生活のなかでの「喜び」や「楽しみ」といった要素がもつ重要性に注目する。

第二節 研究背景

災害研究は従来自然科学の対象とされ、ハザードの解明や事前の予測、ハザードに対する構造物（防波堤、防護柵など）やシステムを構築する理工学研究がイメージされやすい。「ハザード」とは、社会や基盤設備や環境に損害を及ぼす可能性のある力や状況やテクノロジーであり、ハリケーンや地面の揺れ、波、土石流、原子力施設などのことである。人類学的研究における災害の記述は、伝統的な社会生活（神話・儀礼）のなかに、あまり意識されない形で埋め込まれていた。災害を超自然の力のせいだと考えたり、神話や歴史語りに折り込まれていることに言及した研究がほとんどであった。しかし、1980年代頃から、被災者寄りの視点で、フィールドワークの特性を生かした人類学的な災害研究が目につくようになってくる。その代表が人類学者のアンソニー・オリヴァー＝スミスである。彼の研究の核となったのが「脆弱性 (vulnerability)」という概念である。オリヴァー＝スミス (2002=2006) とホフマン (2002=2006) は、災害を「自然的な要素 (ハザード)」と「社会的な要素 (脆弱性)」の相互作用の結果、人びとに破壊や混乱として認識されるものとして位置づけた。「脆弱性 (vulnerability)」とは、ある特定の人びと（たとえば黒人貧困層）が、罹災しやすい場所（決壊しやすい川の近く）に居住している状態などの災害に対する社会的な弱さである。つまり「災害」とは、このハザードという物質的な力やテクノロジーと、脆弱性という社会の弱さが結びついて発現する。近年の災害は、異常気象などハザードの威力を増した結果、ハザードが従来のハード的な対策を上回ったために発生していると思われることもあるが、実際にはハザードの威力が高まっているというよりも脆弱性が低下したことで発生したものもある。

「脆弱性」概念は、ハザードの影響を減少あるいは増大させる社会の諸側面を見たものである (オリヴァー＝スミス・ホフマン 2002=2006)。つまり地域の人々の行動や体制、対処によって脆弱性を低減させることによる防災・減災が可能だと考えられ、各地域で生を営む「人間」に目を向けているのである。また、災害はすべての地域社会が、ある災害を、同じようにあるいは同じ強さで体験するわけではない (前掲書 2002=2006)。つまり、災害素因 (ハザード) が同じであっても地域の脆弱性などによって、被害のパターンが違ってくるのである。これは、地域によって災害対策も様々で、地域固有の災害対策を模索しなければいけないことを示している。この点において、世界規模で進展する人類共通の課題についての、微妙に異なる地域的解決法についての文脈に基づいた分析という人類学的アプローチが意味をもちうるのである (福島 2002)。

この点に関してトルコの地震に対処する社会の創出過程に関する人類学的研究を行った木村は、以下のように記述している。

大地は時に揺らぐ、しかしそれでも私たちの生を支えるものでもあり続けている。必要になるのは、私たちを取り巻く抗いがたい不確実性、脆弱さと向かい合いながら、私たちはいかに生を営んでいけばよいのかを問うことである。(木村 2013:3)

つまり、我々は「災害が存在しない社会」を目指すのではなく、「災害と共に生きる社会」を目指さなければならない。そのため、人文・社会科学的なアプローチに基づく脆弱性低減による防災・減災が重要なのである。

また、災害は「明るみに出すもの」という性質を持っており、社会の様々な側面、「適応」や「社会機構の本質」、あるいは社会が抱えていた問題点や緊張のようなものを明るみに出す(オリヴァー＝スミス・ホフマン 2002=2006)。例えば、災害という出来事をめぐり一貫性と矛盾、協力と対立、権力と抵抗など、様々な社会問題が露わになる。つまり、災害に焦点を当てることで、社会と環境との関わり、あるいは社会のありようについて全体論的な視点で思考することが可能となる。

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、国内観測史上最大のマグニチュード9.0、最大震度7を記録した。この時発生した津波は、東日本を中心に甚大な被害をもたらし、死者・行方不明者数が1万8千人(警察庁緊急災害警備本部広報 2014)を超える未曾有の大災害となった。この震災をめぐって「想定外」という言葉が頻出し、防災対策の根拠となってきた様々な科学的データに対する信頼性が大きく揺らいだ。科学技術が世界の隅々までその影響を及ぼしている私たちの世界には、科学的データにおける数字が渦巻いており、その数字の変動は大きな影響力がある(山下・福島 2005)。東日本大震災のインパクトは、地域の地震予測に関わる科学的データの見直しを迫った。その結果、南海トラフ新想定が公表されたのである(第三章で詳述)。南海トラフ新想定は、人びとの災害に対する認識を一夜にして転変させ、各地域でさまざまな防災・減災活動が行われるようになった。行政による、防波堤や避難タワー、避難所の建設などのハード面の対応も多くなされてきた。しかし、本研究では、行政によるハード面の防災活動だけではなく、地域主体で行われているソフト面の防災活動、すなわち脆弱性を高める草の根の活動により焦点を当てる。

南海トラフ新想定が与えたインパクトによって、変化した(変化していない可能性もある)リスク認識を考察するため、「リスク」概念について説明する。木村(2006)は、トルコのイスタンブールにおける住民の将来の災害に対する認識を、リスクの観点から捉えた。ベック(1986=1998)は、チェルノブイリ原発で発生した無差別的な破壊力の原発事故を受け、環境社会を増殖させる社会のメカニズムを分析し、リスク社会論を説いた。通常、リスクの反対概念は「安全」として捉えられるように、ベックのリスク社会論でも、「リスクか安全か」という図式に基づいて研究されている。しかし、小松(2003)によると、ルーマン(出典)はベックのリスク社会論の「リスクか安全か」という枠組みに対し、リスクが常に行為に伴って生じる以上ゼロにすること(=安全)などできないとした。それに替わり、問題は、意思決定がどう行われるかだとして「危険か

リスクか」という枠組みを提唱した。それによれば、将来起きる可能性のある事象に対し、現在時点においてある人が何らかの対処や決定を行える場合、その事象は「リスク」として認識される。逆にその事象に対して意思決定できる状況になく、突如降りかかってくるように見える場合は、「危険」として認識される。「危険かリスクか」という区別を設けることで、日常的に使用される「リスクか安全か」の区別では見えてこないものを、観察しようというのが、ルーマンのリスク社会論の狙いである（小松 2003）。以上のことを踏まえ木村（2006）は、リスク知覚を「問題を危険からリスクへと変換するプロセス」と見なし、問題を認識しそれに対し何らかの対応を取ろうとする営みを「リスク化」と呼んだ。この概念を採用することにより、災害研究は、各個人や各団体（地域住民、地域団体、行政、国など）災害の脅威について認識し、それに対処する過程について検討することができるのである。

また木村（2014）は、人びとが様々な要素を利用しながら試行錯誤のなかで生み出しつつある、連携と問題共有化の動きを、「公共性」と呼んだ。1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災では、地震による家屋の倒壊や火事が発生し、大きな被害を受けた。そんな中、お互いに生き埋めの人を助け合ったり、消火活動を行ったりと、共助・自助による活動が目立った。阪神・淡路大震災以降、災害への対処を、主体別に「公助」、「共助」、「自助」として分類することが多くなった。そこでは「公助」は行政による支援、「共助」は地域住民同士の助け合いとされている。本研究では、この基本的な共助の枠組みを「共助①」とする。だが木村は（2014）は、住民と行政との繋がりも「共助」と呼ぶ。災害対応においては、「上から（＝公助）」よりも、「下から（＝共助・自助）」の対応が重要であると言われるが、諸アクターとどれだけより良い関係を築いていけるかが重要である。ここで注意したいのは、「より良い関係を築く」ことは、行政側の思惑に統合・一体化することを意味しない点である。そうではなく、諸アクター間に形成されつつある関係性に焦点を当て、アクターの間が多様な考え方や参加・活動の仕方を可能にしているかどうかを見ることが重要である（木村 2013）。つまり、「公助」＋「共助①」＝「共助②」であり、木村が重要と考えたのは住民と行政の繋がりも含む「共助②」である。このように、「公共性」について考察するにあたって重要なのは、問題をめぐって、異なる考えや立場に立つ人・組織の間で、その異なり、すなわち他者とは異なるものとしての自らを維持しつつ、関係性を築いていくことである。先に述べたように、連携と問題共有化の動きなどと聞くと、何かの問題に対して対策する団体などをイメージしてしまうかもしれない。しかしこの「公共性」は、様々な関心や知識をもつ人びとが、日々の暮らしの中で関係性を築いていき、知識や関心を共有しながら、生を営んでいる地域住民の日常生活にも当てはまると考えることもできる。

災害への対処過程では、様々な人々や団体が関わり、災害に抗する新たなネットワークが形成されることが分かった。しかし、それら全てのネットワークが常にうまく機能するわけではない。災害は不確定未来の現象であるので、一時的な防災活動になってしまうことも少なくない。このように、防災活動には持続性の問題が付きまとう。木村（2006）は、トルコのイスタンブールの各地域で行われた防災講習を考察し、防災活動における持続性の問題にも触れている。トルコの防災講習では、出席者の顔ぶれが毎回同じであったり、まったくメンバーが集まらなくなったりなど、持続的に活動を続けられない地域がいくつもあった。しかし、それとは逆に持続的に活動を続けられている地域もあった。そうした地域では、講師と受講者が一緒にチャイ（お茶）をしな

が話し合ったり、軽妙な冗談を交えながら講習を行ったり、講習後にピクニックに行ったりしていた。一見、不真面目（遊び）とも感じ取れるようなことが、持続性をささえた要因だったのである。木村は、これについて深く議論を行っていないが、この緩くて楽しそうな雰囲気（遊び）が、防災活動における持続性問題改善へと繋げられるのではないだろうか。

木村の論文では、トルコの防災組織についてまとめているが、以下では日本における自主防災組織の問題点などについて述べていく。まずは、自主防災組織について記述する。

地域住民の連帯意識に基づき自主防災活動を行う組織で、平常時においては、防災訓練の実施、防災組織の普及啓発、防災巡視、資機材等の共同購入等を行っており、災害時には、初期消火、避難誘導、救出・救護、情報の収集・伝達、給食・給水、災害危険箇所等の巡視等を行う組織。（総務省消防庁 2014）

阪神・淡路大震災以降、自主防災活動用の資材の整備等を促進するための国庫補助制度が創設され、自主防災組織活動の一層の推進が図られた。1995年の段階で、自主防災組織の組織率が43.8%と5割に満たなかった状況から、2013年には77.9%の組織率となっている（総務省消防庁 2014）。自主防災組織の組織率が大幅に増加したことは、一見したところ防災において着実に進歩しているように捉えられる。しかし、自主防災組織については、様々な問題点が指摘されている。自主防災組織とは、その名が示す通り本来は住民たちが「自主的」に防災活動を行う組織である。だが実際は、その組織化において国のテコ入れが強く働き、地域の個性を無視した組織化が進められている。また、自主防災組織の弱体化も懸念されている。弱体化の要因の一つである担い手の高齢化は、特に少子高齢化が進んだ過疎地域において問題視されており、自主防災組織の次なる担い手不足や持続性の問題に繋がっている。庄司（2011）は、「組織率とは1つの指標に過ぎず、形と内実の乖離を示唆しているものとして考えられる」とした（庄司 2011:101）。そこでは東北6県の自主防災組織について述べられているが、高い組織率を誇る県においても、大した活動ができておらず発災時に機能するか不安だという自主防災組織が多く存在した。このような現象は、徳島県の自主防災組織においても見られる。はじめにでも述べたように、徳島県では自主防災組織の組織率は90%を超え、組織率100%の地域もいくつかある。しかし、筆者が調査を行った100%の組織率である自主防災組織も、実際には東北6県における自主防災組織と同じように、高い組織率の割に目立った活動は行われておらず、形と内実の乖離が見られた。このように、自主防災組織においては、担い手の高齢化による自主防災組織の弱体化、自主防災組織の持続性、形と内実の乖離など様々な問題が露わになっている。

これまで述べてきたように、災害における対処過程には、様々な職種、性別、年齢の人々が関わり、多種多様なネットワークが形成されることが望ましい。しかし、形成された組織やその組織によって行われる活動には様々な問題があることが分かった。阪神淡路大震災以降、地域やコミュニティにおける市民活動が注目される渦中で、ハーバーマスの公共空間論のみならず、アレントの公共空間論も注目されるようになってきた（権 2006）。まずは、ハーバーマスとアレントによる公共空間論の違いについて述べていく。斉藤（2000）によると、ハーバーマスの「公共空間」は、「公共圏」とも呼ばれ、そこでは公私の境界をめぐる言説の政治、つまり討議がおこなわ

れる空間である。討議とは、合意または不合意の形成がされる過程のことであり、ハーバーマスの「公共圏」は、ある公の問題に対して一つの答えをだす場だと考えられる。このような「公共圏」においては、個々人にはあまり目を向けられていなかった。対してアレント（1958=1994）の「公共空間」は、「複数性」を条件とした「現れの空間」と呼ばれ、より個々人に目が向けられている。本研究では、政治的視点が強いハーバーマスによる「公共圏」に比べ、個々の人間に注目したアレントによる「現れの空間」概念を参考にし、研究を進める。

「人間の条件」の最も基本的要素となる活動力の考察を行った、ハンナ・アレント（1958=1994）は、人間の活動的生活は、「労働 (labor)」「仕事 (work)」「活動 (action)」で構成されているとした。アレント（1958=1994）による、それぞれの定義を記述する。「労働 (labor)」とは、「人間の肉体の生物学的過程に対応する活動力 (ページ)」である。また「労働 (labor)」は生命維持に必要な活動のことであり、その人間的条件は生命それ自体である。次に、「仕事 (work)」とは、「人間存在の非自然性に対応する活動力 (ページ)」である。人工物を作り、生きるべき世界を築く活動のことであり、「仕事 (work)」の人間的条件は世界性である。最後に、「活動 (action)」とは、「物あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行われる唯一の活動力 (ページ)」である。すなわち、地球上に生き世界に住むのが一人の人間 **man** ではなく、多数の人間 **men** であるという事実に対応している活動であり、「活動 (action)」の人間的条件は「複数性」である。「労働 (labor)」や「仕事 (work)」は一人でも行えることであるが、それに対して「活動 (action)」は複数性を条件としており、この「活動 (action)」を通して私たちは、異なる存在、つまり独自性を手に入れるのである。この「活動 (action)」の領域である公的領域について論じているアレント（1958=1994）は、**public** という言葉は「現れ (appearance)」を含意しており、人は公共的なるものの領域における活動を通じて、他者とは異なるものとしての「自ら (who)」を現すとしている。異なる価値観や意見をもった人びとが自分自身をあらわにし、言論と実践を展開する場こそ「公共空間」であり、その場を「現れの空間 (the space appearance)」とした。つまり、現れの空間（公共空間）は人々を繋げると同時に、自分自身は異なる存在として分離もしているのである。他者がいるからこそ自らの存在を確認でき、言葉や行動も他人に聞いたり見たりしてもらうことで、自分という存在を実感できるのであり、「公共空間」には「複数性」が必要不可欠なのである。

複数性が人間の行為の条件をなすのは、私たちは人間であるという点ですべて同一でありながら、誰一人として、過去に生きた他者、現に生きている他者、将来生きるであろう他者とけっして同一はないからである。(アレント 1958=1994:21)

すなわち私たち一人一人の生は、他に還元することのできない比類のないものである（齋藤2000）。対して、「公共空間」が失われた境遇を、アレントは「私的」という語を使って形容している。

完全に私的な生活を送るということは、なによりもまず、真に人間的な生活に不可欠な物が「奪われている」ということを意味する。すなわち、他人によって見られ聞かれることか

ら生じるリアリティを奪われていること。(アレント 1958=1994:87)

アレントは、このような他者による応答の可能性を失った生を「見棄てられた境遇」と呼んだ(アレント 1958=1994)。「公共空間」においては他者などの「複数性」が重要であるが、災害においても様々な団体や人びとが関わり合って形成される「公共空間」が存在する。しかし、防災組織の例のように形と内実の乖離があるなど、問題のある「公共空間」も少なくない。つまり、ただ集まれば良いというわけではなく、集まった人たちそれぞれの意志や行為が大事なのである。すなわち、指示された通りに機械的に集まり動くだけでは「見棄てられた境遇」となってしまうのだ。「現れの空間」のように、「自ら(who)」を持って関わり合っている「公共空間」が望ましいのである。

第三節 研究目的

本研究では、直面する災害「リスク」に対して地域や地域住民がどのように適応ないしは対応しているのか分析し、その適応によって生まれる「公共空間」を考察する。その「公共空間」においては、自らの意志がなく、ただ集まっただけのように捉えられるような、問題のある「公共空間」(「見棄てられた境遇」)もある。そのため、災害の「リスク」がある地域で生を営む地域や人びとに焦点を当て、災害「リスク」によってどのような「公共空間」が形成されているのか検討する。

第四節 研究方法

災害には、多次元的な現象という特徴があり、主に自然災害(地震、津波、洪水など)とテクノロジー災害(原発、公害)など多様な種類がある。このように、多くの災害があるが、本研究では地震、津波について研究を行う。理由としては、日本に大きな被害をもたらした東日本大震災によって、南海トラフ巨大地震のデータが見直され、南海トラフ新想定が公表された。この南海トラフ新想定が各地域に与えたインパクトが大きく、各地域の防災活動が活発になっている。そのため、各地域で現在行われているそれぞれの適応(地域対策)を考察できる。また、木村(2005)は、災害を「非日常」としてのみ扱うのではなく、日常の文脈のなかで捉える重要性を指摘した。ここで、アレント(1958=1994)の「労働(labor)」「仕事(work)」「活動(action)」の3構成を参考にする。本研究では、行政における防波堤や避難所、避難タワー建設など(ハード面)の対策は、「労働(labor)」「仕事(work)」と捉え、住民主体の防災活動や日常で行われている活動(ソフト面)は、「活動(action)」として捉える。「活動(action)」には、複数性という特徴があり、一人で行うことはできず、様々な人と関わりながら活動する。その「活動(action)」の中には「遊び」という活動もある。先述した木村(2006)のトルコでの災害研究の例のように、緩さや楽しさ(遊び)が持続的な防災活動の重要な要因と考えられる。しかし、命を左右する防災活動において「遊び」は不真面目だという捉えられ方がなされてきたせいも、これまでの災害研究のなかで「遊び」観点から捉えられたものはほとんどない。そのため本研究では、防災活動の持

続性を「遊び」の観点から捉えることとする。まずは、カイヨワの「遊び」の定義と分類についてふれ、チクセントミハイの「遊び」についても記述する。カイヨワ（1958=1970）の「遊び」の定義は以下の通りである。

①自由な活動。遊ぶ人がそれを強制されれば、たちまち遊びは魅力的で楽しい気晴らしという性格を失ってしまう。②分離した活動。あらかじめ定められた厳密な時間および空間の範囲内に限定されている。③不確定の活動。発明の必要の範囲内で、どうしても、或る程度の自由が遊ぶ人のイニシャティヴに委ねられるから、あらかじめ成行きがわかっていたり、結果が得られたりすることはない。④非生産的な活動。財産も、富も、いかなる種類の新しい要素も作り出さない。そして、遊ぶ人々のサークルの内部での所有権の移動を別にすれば、ゲーム開始の時と同じ状況に帰着する。⑤ルールのある活動。通常法律を停止し、その代わりに、それだけが通用する新しい法律を一時的に立てる約束に従う。⑥虚構的活動。現実生活と対立する第二の現実、あるいは、全くの非現実という特有の意識を伴う。（カイヨワ 1958=1970:13-14）

またカイヨワは、「遊び」は4つに分類できるとした。①アゴーン（競争）②アレア（偶然）③ミミクリ（模擬）④イリンクス（眩暈）である。簡単な例を出すと、アゴーンは他者と競争して遊ぶサッカーやチェス。アレアは、偶然の運を遊ぶルーレット、宝くじ。ミミクリは、何かを模倣して遊ぶ、鬼ごっこや演劇。イリンクスは、知覚の混乱を遊ぶ、スキーやオートバイ。さらに、それぞれの遊びは、パイディア（遊戯）に近いのか、ルドゥス（競技）に近いのか分類される。野球を例とすると、日常で友達と集まってする野球は、勝ち負けは重視されず楽しむことが目的であるのでパイディアに近い。プロ野球や部活の野球は、競い合って勝つことが目的なので、ルドゥスに近い。このように、ゲームやスポーツなどの遊びだけではなく、「遊び」の観点から様々なことを研究することができるのである。

さらにチクセントミハイ（1975=2000）は、人間の行動に対する動機付けについて、金銭や地位、権威、尊敬、人気などの「外発的報酬」と、活動自体や、その活動によって生み出される喜びや楽しさ、満足感などの「内発的報酬」に分けた。「仕事（work）」と「遊び」という二分法よりも、「外発的報酬」か「内発的報酬」かで区分することを重要としている。つまり、「仕事（work）」がいつもつまらないとは限らず、「遊び」がいつも楽しいとは限らないということである。これらのことを説明するために重要な概念が、彼の研究の核となっている「フロー」である。「フロー」とは、対象に興味を持ち、楽しさを感じその行為に没頭する状態のことである。たとえば深いフローの場合だと、本を読みだすと自分の世界に入るような状態のことや、スポーツでいうとゾーンに入るということである。「フロー」において重要なのは、自分の能力（技術）と挑戦（課題）の難易度のバランスである。難易度が高すぎると、緊張や不安状態に陥るし、逆に難易度が低すぎると退屈状態が生じる。自分の能力と挑戦のレベルが釣り合っている時に楽しさを感じるのである。このように、「遊び」の時だけに限らず、「仕事（work）」の時においてもフローの状態であれば大きな満足感を得ることが可能となる。しかし、このフロー経験はゲームやスポーツ、または職業のような構造化された活動からのみ得られるのだろうか。それとも日常の生活の中にも

生ずるのかという疑問が浮かび上がる。その点に関してチクセントミハイ（1975=2000）は、「マイクロフロー」という概念を導き出した。これは、フローの浅い状態のことであり、テレビを見る、音楽を聴く、たばこを吸う、意味のない対話などの日常生活の何気ない行為を指している。この「マイクロフロー」活動によっても、内発的報酬はもたらされるとしている。このように「仕事（work）」、「遊び」に限らず日常生活においても楽しみや喜びが生産されるのである。

本研究では、人々の命を守る防災活動において、いかに喜びや楽しみが生産されるのか分析する。そのために、「遊び」という観点から、地域で行われている防災活動を捉える。また、災害の被害抑制を目的として意識的に行われる活動だけではなく、より広い範囲で、通常は積極的には防災と考えられない日常生活にも焦点を当てる。

第五節 調査対象・方法

南海トラフ新想定の公表を受けて、徳島県沿岸地域でも防災・減災活動が活発に行われるようになった。中でも徳島県美波町阿部集落では、南海トラフ新想定後に行政の手がつく前から住民主体で対策が行われた。その代表となったのが「マイ避難路」であり、地域住民によって、多くの避難路が造られた。本研究では、積極的に防災活動が行われている阿部を対象地域とする。

南海トラフ新想定に対して阿部で行われている「リスク化」を、より詳しく考察するために災害のフェーズ（時間的局面）を設ける。災害文化の研究をした林と田中（1989）は、災害のフェーズを①発災前、②警報期、③緊急時、④復旧・復興期に区分した。①発災前とは、災害に対する準備（防災活動や防波堤強化など）が行われている時期のことである。②警報期とは、緊急地震速報などによって与えられる、地震が発災する直前の備えの瞬間に関連する。③緊急時とは、発災直後のことである。④復旧・復興期とは、公共的な整備、また人々が経験した災害を落ち着いて考える時期のことである。これまでの災害研究では、災害発生後の各フェーズ（③～④）に焦点をあててきた。すなわち被災した地に赴き、復興過程からその後の防災に繋げていく活動などを取り上げるものである。だが、現在南海トラフ新想定によって各地域が経験しているのは①発災前であるが、そのリスク化が社会に与えたインパクトは非常に大きい。また、災害発生前のフェーズ（時間的局面）では、過去から将来へ向けての災害の構成についてなど人類学の特性を生かしやすい（2005 木村）。そこで本研究では、林と田中が提出した災害フェーズの①発災前を次のように改変し、発災前のリスク化が社会に与えたインパクトをより詳しく捉えることにした。①発災前という災害のフェーズを、①リスク化期前、②リスク化期後と2つに分けるとする。②の時点を、南海トラフ新想定発表とし、阿部の「リスク化」を考察する。

調査期間は、8月25日～8月29日、9月25日～9月29日の10日間である。調査はインタビューと参与観察を行い、自主防災会の人たちだけでなく、地域に住んでいる一般（防災組織に所属していない）の人たちも対象とした。

第二章 対象地域の概要

本章では、研究対象地域である阿部の概要に加え、阿部の災害文化についても記述する。第一節では、阿部の概要について述べる。第二節では、徳島県南部の 3 つの地域と阿部における昭和南海地震の被害について記述する。そして、第三節で第二章の小括とし、過去の災害文化が阿部住民の津波意識に与える影響について記述する。

第一節 阿部地域の概要

調査地である徳島県美波町阿部は、南側は太平洋に面し、集落の背にあたる北側は標高 440 メートルの明神山を頂点とする海部山脈が走り、西には由岐駅のある本町までの間を 372 メートルと高山が居すわっており、その尾根を海際まで伸ばしている。東側も同じく明神山の左肩がそのまま海まで張り出しており、面積は約 6.3k m²である（写真 1）。昔から「陸の孤島」と呼ばれ、ながらく海上交通が主であったが、昭和 32 年には阿部まで県道が開通し、同 33 年には徳島バスが一日一往復、同 35 年には伊座利（美波町最東端の集落）まで運行されるようになった（由岐町史編纂委員会 1985）。平成 26 年現在バスは一日 4 往復であり、利用する人もごくわずかである。阿部の主な産業は漁業である。その中でも漁獲物は、アワビとイセエビである。地域住民の多くが漁師か海女さんを仕事にしている。地形のために耕地面積は狭く、旱害が多くて農作物があまり獲れなかった。気候は黒潮の影響を受けるために温暖で雨が多く降る。積雪はほとんどない。年間の平均気温は 19 度、降水量は 1700 ミリと、非常に豊潤である。付近に比較的大きな岬があるという地形的な特性から、これまで記録されている最大の津波は高さ約 3 メートルにすぎず、ほとんど被害を受けてこなかった地域である。



写真 1 阿部全体写真（徳島県の漁港より）

2010 年度の国勢調査によると、総世帯数は 121 世帯で、総人口は 244 人であり男女の内訳は（男 113 人：女 131 人）となっている。65 歳以上の人口は 127 人であり、人口の約 52%が高齢

者という少子高齢化が進む地区である。生産年齢人口が少ないことで、活動力のベースとなる若い力が少ないという問題が生じている（表 1）。児童の減少により阿部の唯一の学校である阿部校（阿部小学校と由岐中学校阿部分校が合同）は最後の卒業生 1 人を送り出し、2011 年 3 月 16 日に休校となった（阿部校 HP）。

このような、少子高齢化が進み、さらに「陸の孤島」とも呼ばれる程の孤立した集落に、20メートル級の大津波が来襲する可能性が南海トラフ新想定で示された。高齢者の割合が多く、阿部の自主防災組織によれば、避難の際に助けが必要な要援護者の世帯が 23 世帯ある。このように、高齢化が進み若い世代が少なく、さらに通常は被支援者と思われる人びとが多く暮らしている地域に、県内最大の津波来襲の可能性が宣告されたのである。しかし、阿部ではその後、目覚ましい防災活動が行われていき、今では徳島県の津波防災モデル地区に指定されている。また、2014 年 11 月 2 日には、優れた防災活動を積極的に行っていることで、「とくしま自主防災活動賞」を受賞し、県内で進んだ防災活動を行っている。阿部における防災活動については、第四章、第五章で詳しく記述する。

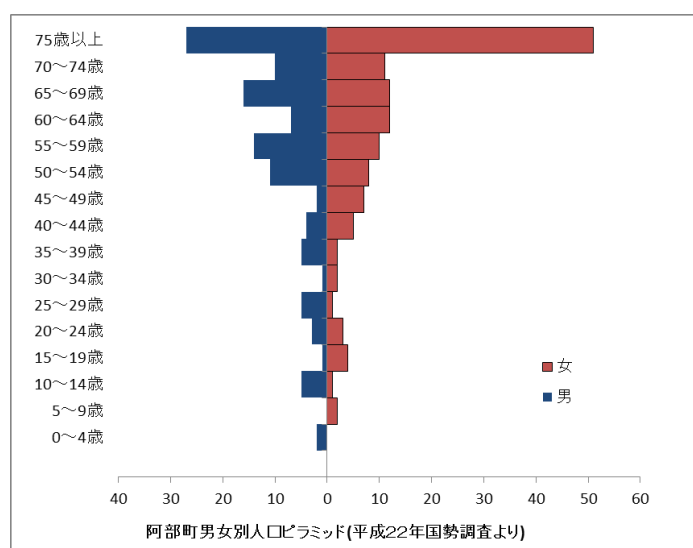


表 1 阿部男女別人口ピラミッド

第二節 昭和南海地震

第一項 徳島県南部における昭和南海地震

徳島県南部の沿岸地域は、南海トラフを震源として 100 年から 150 年周期で発生してきた南海地震とそれに伴う津波によって、幾度となく甚大な被害に見舞われている。1707 年の「宝永地震 (M8.6)」や 1854 年の「安政南海地震 (M8.4)」、1946 年の「昭和南海地震 (M8.0)」、また、1960 年の「チリ地震津波」のように外国の地震によっても被害を受けたこともある。本節では、徳島県南部の昭和南海地震による被害や、当時者の体験談などを記述する。

1946 年 12 月 21 日深夜 4 時 19 分頃、紀伊半島沖を震源とするマグニチュード 8.0 の巨大地震が発生した。南海地震や昭和南海地震と呼ばれる（本研究では昭和南海地震とする）。被害は中部

地方から九州地方まで及び、近畿地方や四国地方が被害の中心となり、地震による被害よりも津波による被害の方が大きかった。津波は房総半島から九州までの沿岸を襲った。津波高は、和歌山県串本町の 6.6 メートルが最高であり、地震発生後 10 分も経たないうちに襲来した地域もあった。被害は、全国で死者・行方不明者数 1400 人以上、全壊 11000 戸以上となった。近畿地方や四国地方が被害の中心と述べたように、その中でも特に和歌山県と高知県、そして徳島県で大きな被害が生じた。徳島県では、死者・行方不明者数 202 人、負傷者数 258 人、全壊 602 戸、半壊 914 戸、床上浸水 3440 戸、床下浸水 1057 戸の被害となった。地震による被害よりも津波による被害の方が大きかった。特に、被害の大きかった浅川、牟岐、宍喰の被害を、表 2 にまとめた（徳島県自然災害誌 1997）。この 3 つの地域が、徳島県の被害の半数以上の割合を占めている。

	死者	負傷者	全壊	半壊	床上浸水	床下浸水
浅川	85	80	161	169	85	15
牟岐	53	40	154	199	755	235
宍喰	9	58	10	107	97	155

表 2 昭和南海地震による牟岐、浅川、宍喰の被害

浅川では、津波の高さは 4.7 メートルに及び、地震後 10 分程して、津波が満ちてくるように押し寄せ部落は殆ど浸水した。徳島県内で、一番多くの死者・負傷者がでており、最も被害を受けた。海南町史に記載されている体験談では、「ゴウゴウと押し寄せた」、「ゴウゴウ、バリバリと底から突きあげてくるような音がする」、「津波が来るぞー！と絶叫する声にはね起きた」など、当時の体験者の生々しい体験記録が残っている（海南町史編纂委員会 1995）。牟岐町でも、地震後 10 分程で津波の来襲があった。津波は計 3 回で、2 回目の津波が一番大きく、引き潮も 2 回目の津波が最も大きく潮が引いた。写真 1 を見ても分かるように、津波の強大な力によって大きな被害が生じたのが明らかである（写真 2）。牟岐町では、この昭和南海地震の貴重な体験談や記録を後世に伝えるために、「南海道地震津波体験談—海が吠えた日—」を出版している（牟岐町教育委員会 1996）。



写真 2 道路に押し上げられた漁船（徳島地方気象台より）

宍喰町には、2012 年度に徳島大学社会調査実習で調査を行った。「当時はスルメが異様に獲れる年で、地震の晩潮の動きが気持ち悪かった」、「裸足で飛び出した」、「みんなで愛宕山に逃げた」、「月のところに星が近づいて、一つ星がある。これが予兆」など、津波から逃れる当時の体験話しの他にも、予兆の話しも聞くことができた。宍喰町では、過去の言い伝えから、津波は 30 分から 1 時間の間があると聞かされていたが、地震から 10 分後程で津波の来襲を受けた。貴重品や手回り品を取り集めているうちに、逃げ遅れた人も多かった（宍喰町教育委員会 1986）。また、宍喰町でも、昭和南海地震の体験記である「南海大地震―五十年の記憶と教訓―」が発行された（徳島県海部郡宍喰町総務部 1996）。他にも、宍喰町では、嘉永 7 年（1854 年）11 月 5 日の安政南海地震の体験記録と、永正 9 年（1512 年）、慶長 9 年（1605 年）、宝永（1707 年）に起きた地震・津波についての調査の記録を記した「震潮記」があり、その著者の子孫の妻である宍喰の住民によって現代語訳された。

このように、徳島県南部では、昭和南海地震や津波により大きな被害が生じたことが分かった。しかし、ただ被害を受けて終わりではなかった。人々の防災意識の高揚に少しでも役立てればという思いから、その体験を後世に残していこうという取り組みが、牟岐町や宍喰町のように各地域で行われていた。それは、昭和南海地震の時だけに限らず、「震潮記」のようなさらに昔の記録を残している例もある。また、徳島県南部には数多くの津波碑も発見されており、後世に津波の記憶や記録を残そうとする例がいくつもある。

第二項 阿部地域における昭和南海地震

昭和南海地震に伴う津波によって甚大な被害がでた 3 地域と対象的だったのが、本研究の調査地である阿部地域である。第一節の阿部の概要でも述べたように、阿部には地形的な特性から、これまで記録されている最大の津波は高さ約 3 メートルにすぎず、ほとんど津波による被害を受けてこなかった。これは、昭和南海地震においても同様であった。以下、阿部での昭和南海地震談をいくつか紹介する。

A さん「昭和南海地震の時、母と小松島にいた。大きな地震で家族が心配になり阿部に帰ることにした。線路沿いを阿南まで歩き、そこで阿部は全滅だと聞いた。えらいこっちゃと思い、そこから車で福井駅まで行き、そこから歩いて山を越え阿部まで帰ったがほぼ被害はなかった。」

B さん「当時は船の持ち主はみんな浜に向かった。川に水がすごい増したが、津波はゆっくりとちよつとずつ。阿部は後ろにいけばいくほど高くなる地形だから、南海の時は潮が満ちていく感じであった。」

C さん「昭和南海の時は、漁に行っていた時空が真っ黒で、潮の引きがおかしかった。スルメのよくとれる年で、その日の漁で父が気象が変わるぞと言っていた。その日の夜中に昭和南海地震発生。津波はゆっくりゆっくりだった。発災時は、大声で呼びかけあった。」

D さん「船が心配で浜に行き、船に乗って沖にでた。他の家族の人はみんな逃げた。他の漁師さんは船をひっぱり上げていた。津波は潮が満ちていく感じで、たいしたことないと思っ

てた。」

E さん「川に船が流れているのが見えた。家が比較的に高い所にあるから、避難せず家にいた。」

F さん「昭和南海の時は、船の番（船を見回り）をしている人が、津波が来るぞ一言っていた。天神山まで逃げた記憶がある。」

阿部では、昭和南海地震によって亡くなった人はいなかった。B さんや C さんの語りから分かるように、津波はゆっくりと潮が満ちていくような感じであって、恐怖と感ずることはなかったようだ。また、津波が起こっているにも関わらず、船を見に行く人が多くいたり、場所的な要因もあるが避難しない人もいたりした。第一項から分かるように、阿部地域以外の徳島県南部の沿岸地域では大きな被害が生じていた。そのため、A さんの語りにあるように阿部でも被害が生じたと考えられていたが、阿部では人的被害がなく拍子抜けのような感じで話していたのが印象的であった。C さんの語りからは、予兆のような話しも聞くことができた。このように、阿部では人的被害がなく、浅川や牟岐や穴喰のような鬼気迫る体験談は聞かれなかった。

第三節 小括：隠されていた「危険」

徳島県南部において、昭和南海地震で大きな被害が生じたことが分かった。特に、例に挙げた浅川、牟岐、穴喰では津波による被害が大きく、徳島県の被害の半数以上の割合を占めた。しかし、それに対して、同じ徳島県南部地域である阿部では、人的被害がなく津波に対して恐怖と感ずるような体験をしなかった。このような経験により、阿部での聞き取り調査では、「津波に対する意識がなかった」、「津波に対して怖いイメージがなかった」、「津波とは潮が満ちるのが早くなっただけ」など、津波を軽視しているような話しをする人が、ほとんどであった。聞き取り調査をした中で津波に対して怖いイメージを持っていた数人は、逃げる時に真っ暗な中 1 人で逃げたのが幼い頃だったのでそれが恐怖と感じた人や、日和佐出身の人であり、阿部で昭和南海地震を経験していない人だった。また、東日本大震災の時には、津波警報がでていながらもかかわらず、多くの阿部住民が海の様子を見に行っていた。このように、阿部の人たちにとって昭和南海地震での経験（災害文化）が、津波の怖さを理解できていなかったことや、津波に対する意識の無さなどの要因となってしまっていることが分かった。こうした事象を負の災害文化と呼ぶことにする。この負の災害文化によって、津波に対して何ら意思決定（対処）できる状態にない「危険」が、住民の意識の外に隠され続けていたのである。

第三章 露わになった「危険」

本章では、リスク化期前における阿部住民の津波に対する意識について記述する。第一節では、南海トラフ巨大地震のデータの見直しの根本的原因となった東日本大震災について、そして南海トラフ新想定について記述する。第二節では、南海トラフ新想定が阿部住民に与えたインパクトを記述する。第三節で第三章の小括とし、阿部地域における津波の「危険」の認識についてまとめる。

第一節 南海トラフ新想定の間緯

第一項 東日本大震災

2011年3月11日午後2時46分頃、三陸沖を震源とした国内観測史上において最大規模（マグニチュード9.0）の東北地方太平洋沖地震が発生した。最大震度7を記録し、宮城県、福島県、茨城県、栃木県の4県37市町村で震度6強を観測したほか、宮城県・沖縄県を除く45都道府県で揺れを観測した。この地震は大津波を併発させ、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部で561km²が浸水し、岩手・宮城・福島の3県を中心に、東日本の太平洋側沿岸地域に甚大な津波被害をもたらした。この3県の津波の最大の高さを見ると、宮城県では女川漁港で14.8メートル、岩手県では大船渡市で16.7メートル、福島県では富岡町で21.1メートルとなっている。津波の遡上高で見ると、宮城県女川市笠貝島で43.3メートル、岩手県宮古市姉吉地区で40.5メートル、福島県相馬市で21.6メートルだ。なお、岩手県ではリアス式海岸の影響を受けて、釜石市で32.4メートル、大船渡市で31.9メートルと、多くの地域で高い津波遡上が確認されている。リアス式海岸地形では、幅が狭くなることや共振効果によって津波は湾奥でより高くなり、岬状のところでは屈折による増大等で津波が襲来すると局所的に集中して高くなる特徴がある（愛媛大学防災情報研究センター 2012）。

地震の揺れや大津波以外にも、液状化や地盤沈下などによって、東日本の広い範囲で各種インフラや住宅等に大きな被害が発生した。さらに、巨大地震と大津波によって、東京電力福島第一原子力発電所のプラントが損壊され、放射性物質の飛散を含む深刻な原発事故を誘発した。福島第一原発の事故は、日本人がいまだかつて経験したことのない深刻な原子力災害となった。3月11日午後2時46分頃、マグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震を感知し、茨城から宮城にいたる東日本一帯に設置されている原発のいずれも原子炉内に制御棒が挿入され自動停止した。その後冷却機能は維持されていたが、およそ1時間後に設計高を超える14メートル以上の津波が来襲し、福島第一原子力発電所では、非常用電源を含め全電源喪失の状態となった。原子炉の冷却を維持できなくなり、原子炉内の温度および圧力の上昇をきたし危険な状態になった。ベントや海水注水等の緊急対応を試みるも水素爆発が発生し原子炉建屋が破壊され、放射性物質を多量

に環境へ放出するに至ったのである。50年にも及ぶ我が国の原子力開発の歴史上初めての水素爆発となった。発生すれば国境を越えた深刻な災害になりかねない原発事故は、その被害や影響度によって、全世界共通の基準のもとにランク分けされ、公表される。国際原子力機関（IAEA）などが策定した国際原子力・放射線事象評価尺度（INES）が使われており、最も軽度なレベル0から最も深刻なレベル7までの8段階からなる。今までのところ、1986年のチェルノブイリ原発事故と今回の福島第一原発事故がレベル7に分類されている。

こうした未曾有の津波被害や原発事故などの深刻な事態を受けて、政府は地震発生から3週間後の4月1日の持ち回り閣議で、今回の大災害を東日本大震災と呼ぶこととした（関西大学社会安全学部 2012）。このように、東日本大震災は、地震、津波、原発事故からなる巨大複合災害である。その犠牲者数は、死者・行方不明者数約18550人（警察庁緊急災害警備本部広報 2014）、被害総額約16兆9000億（内閣府 2014）と見積もられている。特に、岩手・宮城・福島では、深刻な被害状況である。それぞれの死者行方不明者数は、岩手県5815人、宮城県10817人、福島県1814人となっている（警察庁緊急災害警備本部広報 2014）。また、あまり注目されていないが、東京都7人、茨城県25人、千葉県7人など、他の都道府県でも死者は出ており、今回の災害が広域災害だったことが分かる。

東北地方では、これまでも大きな地震を何度も経験してきた。この10年間に発生した震度6クラスの地震に限ってみても、2003年の三陸南海地震と宮城県北部地震、2008年の岩手・宮城内陸地震と岩手県沿岸北部地震といった大きな地震が挙げられる。津波でも、1896年の明治三陸津波（マグニチュード8.2）、1933年の昭和三陸津波（マグニチュード8.1）、1960年のチリ津波（マグニチュード9.5[世界最大]）などの大津波による被害を受けている。特に明治三陸津波は、今回の津波に近い大津波が来襲している。地震動が小さかった（震度3程度）ため、ほとんどの人びとが避難せず、死者行方不明者数は21959人（国土交通省 2014）となっている。近代以降では関東大震災に次ぐ災害であった。海岸沿いには、これらの津波経験を踏まえて建設された防波堤がいくつもあった。しかし、釜石港の最大水深63メートルの、ギネスブックにも記載された巨大防波堤でさえ、今回の津波で破壊された。多くの地域で明治三陸津波の時以上の津波が来襲し、約1800人を超える死者・行方不明者を出した陸前高田市をはじめ、大船渡、釜石、宮古など、津波対策では世界で最も進んでいるといわれてきた町や村が、想定をはるかに上回る自然の猛威によって、見る影もなく壊滅したのである。また、今回の津波では、大津波の経験がほとんどなかった石巻や仙台など、津波に対する警戒心が低かった平野部にも津波が押し寄せ、壊滅的な被害をもたらした。

このように、津波被害の歴史が深く、津波対策が進んでいた地域でさえ大きな被害がでた。自然災害では戦後最大となる人的被害となった東日本大震災では多くの人びと、主に学者が「想定外」という言葉を使用した。そういわざるを得ない程の深刻な被害だったのである。その被害は日本全体にとどまらず、国外へも波及し、国難といえる事態に及んだ。この「想定外」は、第一章でも述べたように、防災対策の根拠となってきた様々な科学的データに対する信頼性が大きく揺らいだのである。さらに、福島第一原発事故によって、安全だと思われていた原子力発電所の「安全神話」が崩れたことも、信頼性への影響があったと考えられる。東北地方太平洋沖地震、またそれによる津波被害と原発事故は、「このままの防災体制でいいのか？」ということ、我々

に問いかけたのであり、南海トラフ新想定に至ったのである。

第二項 南海トラフ新想定

東日本大震災を受け、2011年8月に「南海トラフの巨大地震モデル検討会」が内閣府に設置された。これまで中央防災会議が対象としてきた南海トラフで発生する大規模地震の想定は、過去に発生した地震と同様な地震に対して備えることを基本として、過去数百年間に発生した地震の記録の再現を念頭としてきた。しかし、東北地方太平洋沖地震が、過去数百年間の資料では確認できなかった想定外の巨大な地震となったことから、地震・津波の想定のを抜本的に見直す必要があると考えられた。現時点の科学的知見に基づきあらゆる可能性を考慮した最大クラスの巨大な地震・津波が検討されるようになったのである（内閣府 2014）。

2011年12月27日に「南海トラフの巨大地震モデル検討会」において示された、南海トラフ巨大地震において想定される震源断層域は、平成15年の中央防災会議で示されたものの約2倍の面積であった。また予想される最大の地震の強さもマグニチュード8.7から、マグニチュード9.1に変更された。こうして新たに想定された震源域や地震の強さに基づき、「南海トラフの巨大地震モデル検討会」は、2012年3月31日に「南海トラフの巨大地震による震度分布・津波高（第一次報告）」、2012年8月29日に「南海トラフの巨大地震による津波高・浸水域等（第二次報告）及び被害想定(第一次報告)」を公表した。この8月の第二次報告では、最大クラスの地震（マグニチュード9.1）を想定した地震動と津波高が推定された。その結果、前回の中央防災会議（平成15年）の想定震度6弱以上で3倍、震度7以上で10倍の広さになっている。震度7を越える地域が10の県にあたる総計151市区町村に達することが分かり、より広い範囲で激しい揺れが想定されている。さらに、津波の予測では20メートルを超える高い津波の来る地域が広がり、最大の津波高が高知県の黒潮町と土佐清水市で34メートルとなっている。最速到達時間（1メートルの津波）では、和歌山県串本町で2分とされており、10分も経たないうちに津波被害を受ける地域が多くある。

「南海トラフの巨大地震モデル検討会」による震度分布・津波高の発表を受け、人的・物的被害や経済被害等の及び被害シナリオを検討するために、2012年3月7日に内閣府に「南海トラフ巨大地震対策検討ワーキンググループ」が設置された（内閣府 2014）。2012年8月29日に「南海トラフの巨大地震による被害想定(第一次報告)」、2013年3月18日には、「南海トラフの巨大地震による被害想定（第二次報告）」を公表した。その結果、最悪ケースで死者約32万人、負傷者が約63万人、建物の全壊が約239万戸に上る。3000万人超が断水に見舞われ、2700万軒超が停電し、経済的損失は約220兆円と見込まれており、多大な被害を受けることが分かる。

南海トラフ新想定は、徳島県にも大きな衝撃を与えた。徳島県は、「地震津波減災対策検討委員会」を2011年4月18日に立ち上げ、2011年12月21日には「津波高暫定値」、2012年1月20日には「暫定津波浸水予測図」を国に先駆けて公表した。その後、国の公表（2012年3月31日に「南海トラフの巨大地震による震度分布・津波高（第一次報告）」、2012年8月29日に「南海トラフの巨大地震による津波高・浸水域等（第二次報告）及び被害想定(第一次報告)」）と、県の

最新地形データを反映して、2012年10月31日に「津波浸水想定」を公表した。県内のほとんどの地域で震度6強以上、最大震度7と予想され、津波高や津波浸水の想定も前回から数値が大きく上がっている。特に県南部の沿岸地域では、最大津波高が20.9メートル（美波町）と県内で最大であり、地震発生12分で津波被害が予想されている。徳島県では最大ケースとして、全壊棟数約11万6千棟、死者数約3万人と想定され、そのうち津波での死者数は約2万6千人となっている（図1）。このように、徳島県でも多大な被害、特に津波による被害の深刻さが予想されており、南海トラフ新想定を受け、各地域でさまざまな防災・減災活動が行われるようになっていく。

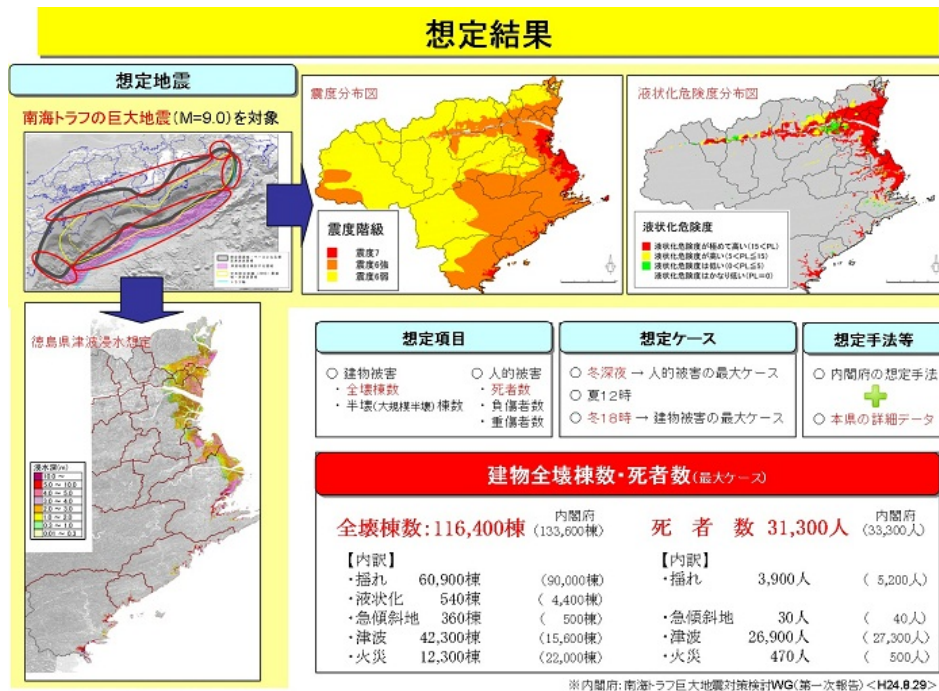


図1 徳島県南海トラフ巨大地震被害想定（第一次）の公表（安心とくしま HP より）

第二節 南海トラフ新想定によるインパクト

これまで述べてきたように、阿部住民の多くの人が昭和南海地震を経験して、人的被害がなかったことや他地域に比べ大した津波が来襲しなかったことで、津波に対する意識がなかったことが分かった。また、阿部はもともと自然災害の被害が少ない地域だと話す人が多くおり、洪水や土砂災害など津波以外の自然災害に対しても意識があまりなかった。しかし、このような津波に対する意識の中、阿部住民の災害認識を揺るがす大きな出来事が起きる。2011年3月11日に東日本大震災が発生し、南海トラフ巨大地震のデータの見直しが図られた。そして第一節の第二項でも述べたように、徳島県では、「地震津波減災対策検討委員会」が2011年4月18日に立ち上げられ、2011年12月21日には国に先駆けて「津波高暫定値」が公表され、阿部漁港に20メートル級の大津波が来襲する可能性が浮上した。ここで阿部住民は、「津波」という災害に初めてリアリティを感じたのである。明日発生するかも知れない津波の来襲に備えることが急務となった。しかし、津波に対する意識がなかった阿部では以下のような語りが聞かれ、当初の状況を物語る

ている。

Gさん「実感が湧かず、何をしたらいいか分からなかった」

Hさん「家もろとも死んでもええかな思ってた」

Iさん「昭和南海地震の経験もあるし、昔とは違って環境も違うから（今では防波堤がある）、今回もたいしたことはないんじゃないかなと思ってるし、本間に来るのかなあ」

Jさん「神経質になって1ヵ月程寝つきが悪かった。今でも寝つきが悪い時がある」

Kさん「不安で寝れん時もあってねえ」

以上の語りから分かるように、実感が湧かず諦めムードの人や半信半疑の人が多くいた。また、JさんやKさんの語りにあるように、神経質になって寝つきが悪くなった人や不安で寝られない人もでてくるなど、南海トラフ新想定は住民に大きな不安や恐怖も与えた。どうにかしないといけないという人も少なからずいたが、これまで津波対策をしたことがない阿部の住民たちは、具体的に行動に移せない状況であった。さらに、南海トラフ新想定によりリスク認識が激変する事態は、県や町の行政担当者にも同様であったため、当初は行政も対処がしにくい状況であった。このように、阿部住民や行政は身動きが取れず、20メートル級の大津波来襲の可能性に目を伏せて過ごしていくしかなかった。

第三節 小括：潜在的「危険」から顕在的「危険」へ

第二章では、阿部の過去の災害文化が、阿部住民の津波に対する意識の無さなどの要因であることが明らかになった。しかし、このような住民の津波に対する意識が無い中、東日本大震災が発生し、南海トラフ新想定が公表された。南海トラフ新想定では、阿部に大津波来襲の可能性が指摘され、阿部住民のリスク認識は一変したが、津波に対する意識がなかった阿部住民はどうすればいいか分からず身動きがとれない状況であった。また、人口の大半が高齢者で若い世代も少なく、要援護者と考えられる人の割合も少なくない。学校は休校となっており、地域の存続自体厳しい地域なのである。さらに、頼りである行政も当時は、南海トラフ新想定インパクトがあまりにも大きかったため、対処が進まない状況であった。津波に対して意思決定（対処）できる状況になく、阿部は「危険」な状態に陥っていたのである。このように、過去の災害文化などによって隠されていた潜在的「危険」が、東日本大震災や南海トラフ新想定によって顕在的「危険」へと変化した。第四章では、その「危険」な状態を脱した阿部地域における「リスク化」について、つまり、リスク化期後における阿部地域の活動を考察する。

第四章 「危険」から「リスク」へ

本章では主に、南海トラフ新想定後に行われた阿部地域の「リスク化」、その代表となった「マイ避難路」造りについて考察する（写真 3）。第一節では、「マイ避難路」作成の経緯や特性や作成者、そしてその作成者の取り組みへの思いなどについて記述する。第二節では、行政や様々なアクターと行われた防災活動について述べる。第三節で第四章の小括とし、阿部地域のリスク化期後の活動をまとめる。



写真 3 阿部のマイ避難路

第一節 マイ避難路の概要

第三章で分かったように、阿部では昭和南海地震などの経験により隠れていた潜在的「危険」が、南海トラフ新想定などにより顕在的「危険」へと変化したことで、津波に対して意識を持つようになった。しかし、過去に津波対策をしてこなかった阿部では、津波対策を進めることができなかった。このような厳しい状況の中、南海トラフ新想定を受けて阿部では、3つの避難路が迅速に整備された。この3つの避難路は個人が単独で作成した自主整備避難路であり、2012年1月には完成していた。それぞれ、「家族の体力が落ちてきた」、「近所に小さい子供たちがいる」、「妻が大腿部の手術をした」などの理由から、個人的に避難路を作成したのである。その後、2012年1月1日に阿部自主防災会が設立し、これ以降、阿部における大規模な避難路作成が始まった。

南海トラフ新想定では、阿部に徳島県で最も高い最大20.9メートルの津波が到来する可能性が指摘された。具体的には、南海トラフ巨大地震発生後、わずか12分で1メートルの津波が到達し、30分後には20メートル超の津波が押し寄せることが予測されている。集落の人家は全て浸水予測域内にあり、最も高い阿部学校でも13メートルの高さしかなく、阿部の場合、集落の背後にある山間部に沿って伸びる海拔20メートルラインが、人びとの生死を分ける境界線として実体化していった。また、阿部では県道の位置が20メートルラインを超えるように存在しているため、この県道へ向かって集落のどこからでも逃げるができるように、地域内に分散して避難

路が整備された。20本もの避難路を作ったのは、阿部は65歳以上の人口は127人で人口の約52%が高齢者という少子高齢化が進む地区であるからだ。集落に居住するすべての独居高齢者が、津波到達時刻までに高台への避難を完了することを目的としている。このように、阿部に暮らす住民が集落のどこからでも津波の被害から逃げられるようにしていることが、「マイ避難路」と呼ばれる所以である。

図2は阿部地区防災マップである。阿部地区全体のマップで避難路などが記載されているほかに、西集合地、東集合地、中央集合地も記載されている。これは、避難後のそれぞれの地区の集合地となっている。もし津波に襲われた場合、その被害から逃れるために長時間高台に避難し続けなければならない。そのため、一次避難場所である中央集合地には、食料や水、毛布や薬などを備蓄している。足腰が悪く避難をするのに時間がかかる高齢者の人たちは、持ち出し荷物（主に他人に借りられない下着、歯ブラシ、薬など）を事前に備蓄倉庫で預かっている。上でも述べたように、阿部では約12分で津波での被害が予想されている。津波からの避難は時間との勝負であると考えた阿部自主防災会は、経路別避難予測時間（健常者は1秒で1メートル、歩行器使用者は2秒で1メートルとする）を計算した。それによると阿部地区では、避難口（階段下、坂の下）まで健常者は平均約3分、歩行器使用者はその倍の約6分で移動可能なことが分かった。地震の揺れは約3分、それぞれ避難準備に約3分と考えると、健常者は約9分で避難を完了することができる。阿部では、この残りの3分を共助可能時間とし、避難途中や避難口で約3分災害弱者の援助ができると考えている。発災時に素早く避難できるように、持ち出し荷物を事前に預かるような、少しでも避難時間を作る細かな工夫が施されているのである。このように、第一の津波から逃れたあとは、各避難場所に集まり最終的に中央集合地に集合し、ここで救助や救援を待つこととなっている。避難路を県道に繋げたのは、ばらばらに救助や救援を待つのでなく、一つの場所で、全員で耐え凌げるようにという意義があるのである。



図 2 阿部地区防災マップ

第一項 マイ避難路の特性

これら阿部の「マイ避難路」は、南海トラフ新想定公表後わずか 2 ヶ月程で大部分が作成された。このように、迅速に効率よく避難路が造られた要因は何だったのだろうか。それには、次のような背景がある。阿部で作成された避難路の中で、今回の南海トラフ新想定後に新しく造られた路は 5 本だけで、その他の路は、これまで別の用途で使われていた道を避難路に転用したものである(表 3)。例えば、亀岡路は阿部小学校を新築するときに仮設した工事用道路を使っている。西寺路は英霊塔へ向かう道を転用し、八毛路や尾鼻路は田んぼへ向かう道を使っている。

新たに造った路	既存の路を利用した路
家山路	亀岡路
橋本路	蔭谷路
喜多條路	八軒屋路
宮前路	上村路
天神山路	松村路
	八毛路
	西寺路
	東寺路
	山賀路
	松下路
	観音路
	御旅路
	尾鼻路
	常陸路
	五輪路

表 3 避難路の種類

また、これらの転用した既存の路の中には、使われていなかった古道を改修したものが 8 件あった(表 4)。例えば、蔭谷路はかつて阿部で土葬をしていたころの公衆用道路であり、焼き場までの通り道を改修した。八軒屋路は、昔あった阿部と由岐をつなぐ連絡道を使っている。御旅路は、阿部の祭りで使われていた路を用いている。松村路や常陸路では、山で薪を切り出して運んでいた際の山林作業用道が使われている。このように昔からの土地に関する知識や細やかな情報が頭に入っていると、「あの場所に昔の道があるから使える」ということや、「あの道は地盤が弱いから修復しなければいけない」といったような判断をすることができ、効率的な避難路作成を可能にした。普通はいずれ消えゆくはずの古道が、新たに避難路として息を吹き返したのである。

既存の路	使われていなかった古道
亀岡路	
蔭谷路	○
八軒屋路	○
上村路	○
松村路	○
八毛路	
西寺路	
東寺路	○
山賀路	
松下路	○
観音路	
御旅路	○
尾鼻路	
常陸路	○
五輪路	

表 4 既存の避難路

第二項 マイ避難路作成者

それでは、こうした土地の利用形態を熟知し、迅速な避難路作成を行ったのはどのような人々だったのだろうか。避難路の作成者は、大きく分けるとその避難路の土地の権利を持っている地権者、またはその避難路の利用者である場合と、地元の有志である場合の 2 つに分けることができる。しかし、地権者や利用者が自分で避難路を造ったのは 3 例のみである。ほとんどの避難路は地元の有志（ボランティア）によって作成されたのであり、阿部の「マイ避難路」造りは地元の有志の協力によって支えられていたのである（表 5）。その地元の有志の中でも、作成に多く携わった 5 人の経歴を列挙する（表 6）。

名称	地権者・利用者	自主防災会
亀岡路	公共工事の際に作られた	
蔭谷路	○	
八軒屋路	○	
上村路	○	
松村路		◎
家山路		◎
八毛路		◎
橋本路		◎
喜多條路		◎
西寺路		◎
東寺路		◎
山賀路		◎
松下路		◎
観音路		◎
宮前路		◎
御旅路		◎
尾鼻路		◎
天神山路		◎
常陸路		◎
五輪路		◎

表 5 各避難路の作成者

	経歴
Lさん	阿部出身で、徳島市内で銀行員をしていた。退職を機に阿部へUターンしてきたが、徳島市内にも家を構えており、2つの家を必要に応じて行き来している。
Mさん	阿部出身で、阿南市内でNTTの職場業務に従事していた。退職を機に阿部へUターンしてきたが、阿南市内にも家を構えており、必要に応じて2つの家を行き来している。
Nさん	阿部出身で、大阪の自動車整備会社で働いていた。勤めていた会社の倒産により、阿部へUターンをし、漁師として働き始めた。
Oさん	阿部出身で、奈良でJRの車掌業務に従事していた。退職を機に阿部へUターンしてきた。
Pさん	阿部出身で、京都の舞鶴で潜水夫をしていた。退職を機に阿部へUターンしてきた。

表6 主なマイ避難路作成者の経歴

この経歴を見ると、彼らは全員共通して、退職後に阿部にUターンしてきた人々であることが分かる。それぞれ就職によって徳島市内や阿南市内、または県外へと出て行き、いったん阿部を離れ都市部で暮らし、退職後に再び阿部へ戻ってきたという人たちである。このような経歴を持つ人々が主体となって、阿部のマイ避難路づくりは行われてきたのである。彼らはみな阿部出身者であるので、かつての土地利用形態や、山の仕事等の知識や技術を持っていた。それらのノウハウを活かして、阿部の「マイ避難路」は効率的に造り上げられていったのである。阿部にはその手法を活かした、避難路作成を詳細に記述した独自のマニュアルが存在する。それは、阿部自主防災会事務局長であるLさんが作成した避難路作成のマニュアルである。その特徴として挙げられるのが、避難路を作成する際に、現地に有る物を有効に活用するという作成方法である。例えば、ロープの結び方は漁村ならではの「とっくり結び」と呼ばれる手法が用いられている。この結び方は強度があり、基点から基点へのロープの緩みを阻止している。また、ここで用いられている手すりのロープは、阿部の延縄漁で使われていた縄を再利用している。もう使われなくなったものとはいえ、その強度は普通のロープより高い。避難路のコース取りにおいても、既存の道を再利用するなど効率的な手法が用いられているが、作成に当たっても現地の物を利用するなどその性質は維持されている。さらに、避難路入口などの各所に避難の際に使えるように、独自に作成された杖や担架などが置かれている(写真4)。上でも述べたように、阿部においては高齢者が多く、足の不自由な人も多いため、このような避難補助具が設置されているのである。このように阿部では、Uターン者が中心となって、昔からの土地利用に関する知識や技術が随所に見受けられる避難路作成の手法が展開され、随所に避難する住民への配慮が成されている。



写真 4 避難用具箱と杖

第三項 作成者の思い

それでは、彼らはどのような意識をもって避難路造りに携わっているのだろうか。マイ避難路作成に多く携わり、阿部自主防災会事務局長のリーダー的存在である L さんの語りを紹介する。

これから（避難路の）管理が大変でしょって言うけど、思いようによっては、最初の思いからすれば、楽なもんじゃないか。

草刈るって言うたって、一回行ったら全部刈れるじゃないですか。

最初一本作るのに何日もかかるとるじゃないですか。な？

ほなけんほんな草刈るんごっつい（しんどい）と思ってないですね。大変大変とは思っていない。

でまあ、それぞれにこのルートだったら〇〇さん（住民）あっこ草いっぱい生えとんなあ、とか言ううったらええん。また刈っというてようて。

で、刈ってくればええし、刈ってくれなんだからもうちょっと行ってちょこちょここと合間で。

僕は 15 分体が空いたら 15 分の仕事をしに行くんよ。

30 分空いたら 30 分に合う仕事をしてくるんよ。

ほたらもんてきておいて、まだあんたやらが来るんに 30 分くらい早かったんな、今日の朝だったら。

ほしたらついでに燃料がちょっと残ったからほこの三角、ほの建物の西側の草もついでに刈ってある。

ほんでまた燃料があつたら学校のグリーンベルトを作ったんを、土が流れてこんように、ほれの芝の上を撥ねに行きたかったんやけどほこで燃料が切れて行かんかった。（笑）

作業服やっぱ一日に二着いるんですよ。つなぎが。

で、朝着替えて、出て行って仕事したら、もうもんてきたら、こう首のタオルな、首のタオル入れて作業服着いとんやけど、つなぎ着いとんやけど首のタオルが絞れるくらい。

んでね、夏場海行く日とほんな作業する日とでしょ。でね、9 月のお祭りまでにだいたい僕

10キロ近く減量するけえね。ピーク 73 キロくらいになるんよう。今 65 キロくらいまで落つとるけんね。

ほんで、昼帰ってきて、シャワーしてご飯食べて、ちょっと休憩したら、また昼から出て行く。

ほしたら、こんな暑い時間から仕事するんかって言うはみな。

いや、この時間しかワイは空いてないと。(笑) ほて、今からするいうて。

へいちゃら！あつつい最中でも。ほな、熱中症にどしてならんのお？って (みんな) 言うでしよ。

ふつうは喉が乾くから水を取りたいんちゃん？でも僕は違うんですよ。

汗をかくために水分を補給しよんですよ。考え方は。

ほでまあ磯へ歩いてもなんで船があるのにほんな遠いとこまで歩いていくんな。えらあないんか？

うん、ほれによってワイは夏場に減量するんじゃ。(笑)

ほんでこう、ぐりぐりした足場の悪いとこ歩いていくでしよ。ほんで足のこう、これ、(足の筋肉を見せる) で、体やって、ワイ事務屋なんで？(二の腕の筋肉を見せる) ちょ、裸になってええ？(衣服を脱ぎ上半身裸になり筋肉を見せる) 銀行行つとったときはこんな体じゃなかった。

やから、えらいことしても思いようなんよな。

自分の体のため、こやってな磯やあんな足場の悪いとこなあ、歩いて散歩に行けたあて行けんぞお？

ほなけん運動のために道路をみな歩つきよんですよお。

僕あんなことはようせんのように。なんでアホみたいに歩くん？(笑) え？

歩くんなら、ついでに空き缶でも拾って歩けちゅうんよ。ほなけん空き缶ひろいに行くんだったらよう歩いていくけど、散歩に日に日に歩けっていうたらよう歩かん。

「これから(避難路の) 管理が大変でしよって言うけどー(中略)ー最初一本作るのに何日もかかるとるじゃないですか」。この語りからは、Lさんの性格上の性質ということも考えられるが、避難路の作成について、とても前向きな考えを表している。また、「僕は 15 分体が空いたら 15 分の仕事をしに行くんよ。30 分空いたら 30 分に合う仕事をしてくるんよ」という語りでは、時間を有効的に活用して、自分のできることをしていこうという意識が読み取れる。ここに阿部の「マイ避難路」の特性である、自分の持てる知識や技術を積極的に駆使した主体性の裏付けが見られる。避難路の整備はこれからも継続して行わなければならないことだが、それを苦勞する作業としては捉えておらず、自分のできることをやれば良いという前向きな考え方を持っていることが分かる。

「昼帰ってきて、シャワーしてご飯食べて、ちょっと休憩したら、また昼から出て行く。ー(中略)ーほんで足のこう、これ、(足の筋肉を見せる) で、体やって、ワイ事務屋なんで？(二の腕の筋肉を見せる) ちょ、裸になってええ？(衣服を脱ぎ上半身裸になり筋肉を見せる)」この語りには、語りの中で Lさんが最も楽しそうに、そして誇らしげに、語っていた部分である。真夏の暑

い日でも L さんは、朝から仕事に出て汗をかく。周りからは、真夏の昼間から働いたり、磯へ船を使わずに歩いて行ったりすることを不思議に思われている。しかし、L さんは気にもせず、「減量のため」と笑顔で話してくれた。そして、日々の鍛錬の成果といえる、自身の筋肉を披露してくれた。ここには、避難路整備の仕事による達成感や、それにとまなう自信の誇示が表れている。これらのことから、L さんは日々行っている避難路整備を自身の体作りのためというように位置づけ、仕事に対するモチベーションを確立しているのではないかと考えられる。このように、L さんの語りからは、20 本近い避難路作成は相当な労力にもかかわらず、避難路作成に対しての苦労感があまり感じられなかった。避難路造りの経験を終始、笑顔で楽しそうに話していたことも印象的であった。

第二節 外部アクターとの防災活動

これまで述べてきた、阿部における「マイ避難路」造りは、行政側からも高く評価され、阿部は徳島県の「津波減災県南モデル」に指定されている。これは、モデル地区の対策を県南部、そして徳島県のお手本として広めていくこと。また、美波町や徳島県の防災事業（避難訓練や避難後生活）をモデル地区で積極的に行い、その効果や改善点などの情報を県南部全域、徳島県全域へ広め取り組みを拡大させる。つまり、モデル地区は徳島県の防災活動の牽引役なのである。このモデル地区に指定されたことで、阿部では行政と連携して行われる防災活動も盛んになった。さらに、阿部での「マイ避難路」作成の動きを、数多くのメディアが取り上げるようになり、結果的にこれまでなかった様々なアクターと問題を共有、連携するようになった。外部との連携は全て、自主防災会が受け皿となりリードして行われている。

行政との連携では、避難路に手すりが付けられたり、避難道をコンクリートで舗装したりと、避難しやすいように避難路整備が行われた。観音路と上村路を舗装すれば、ひとまず避難路の舗装は完成だとされており、今年度中に終わる予定である。他には、夜間時の発災を考え、バッテリー付き LED 防犯灯が設置された。設置場所は、20 メートルラインに 9 基、町内に 6 基設置され、停電時でも 4 時間程点灯する。また、来年度の予定として、中央集合地の上にヘリポートを建設する予定である。現在は、隣集落の伊座利への県道 3 キロメートル程の位置にある空き地を、臨時のヘリポートとしている。さらに、阿部ではテレビ局とも連携して防災活動が行われている。この防災活動の特徴を挙げていく。①発災時に名前が入った避難指示画面をテレビに表示し、危機意識を高め早く避難するように促す。②それぞれ各住民の情報が入った IC カードを、避難場所で携帯やタブレットで読み込む。IC カードを読み込むことで、その人の登録情報（年齢、性別、既往症、常用薬、障害）が表示され、救助側へ情報を提供し、配布される支援物資の適切化が期待される。③タブレット上に、阿部全体の地図が表示され、避難完了の人と避難ができていない人を簡単に把握できる。④IC カードを読み取ることで、遠隔地の家族などに「安否確認」のメールが送信される。この取り組みは、総務省の平成 24 年度補正予算「ICT 街づくり推進事業」の実証実験プロジェクトの一つであり、全国でも進んだ防災活動が行われていることが分かる。

このように、阿部では行政や様々なアクターと連携して防災活動が行われている。しかし、どの連携に関してもアクター側に事業を丸投げするのではなく、阿部地域側が「この場所が（に）」

と要請し、うまく連携して活動が行われている。上で述べた実証実験プロジェクトに参加した理由も、発災時には県道が寸断され孤立集落となる可能性が高く、避難所の情報を外部に伝えることが重要という考えの基からである。近づいてきたアクター全てと関わるわけではなく、阿部地域の考えに基づいて、どのアクターと連携するのが最適なのか選択している。自主防災会の事務局長であるLさんは、アクターの要件を受け入れるだけではなく、必ず「それならこうしてくれ」と要件を返し、“はい”だけでは終わらせない。また、Lさんと話しをしている時に、よくアクターの不満や改善点を言っているのも印象的であった。このように、行政などからの計画や指示を機械的にこなすのではなく、あくまで対等に、または逆に利用して防災活動を進めているように感じ取れた。

第三節 小括：「リスク化」での「遊び」

第三章では、南海トラフ新想定によって大津波来襲の可能性を宣告されたが、何も対処できる状況にない「危険」な状態に陥っていた。その状況を打破したのが、住民主体で作成された「マイ避難路」である。この「マイ避難路」によって、阿部住民の「危険」な状態が、何らかの対処や決定を行える場合の「リスク」へと変換されたのである。つまり、阿部では行政に頼らず住民主体で「リスク化」が行われたのである。さらに、「マイ避難路」が行政に評価、多くのメディアに取り上げられたことで、様々なアクターと関わりながら「リスク化」が進められてきた。

「マイ避難路」造りをより詳しく考察してみると、阿部での迅速で効率的な避難路造りは、次の2点によって可能になったものと考えられる。まずは、過去に別の用途で使われていた既存の古道を再利用した避難路が多く、かつての土地利用形態に関する知識が豊富であったという点。次に、ほとんどの避難路が、そのような土地利用形態の知識が豊富な地元の有志によるボランティア活動として作成されたという点である。こうした避難路造りの担い手は、退職後に阿部にUターンしてきた団塊世代の人々であった。彼らは、避難路造りを苦に思っておらず、むしろ楽しんで作成を行っているように感じ取れた。それでは、彼らの楽しみや生きがいとは、どういったものなのだろうか。ここで、阿部の「マイ避難路」造りを「遊び」の観点から捉えてみる。

阿部の「マイ避難路」造りを、第一章で述べたカイヨワ（1958=1970）の遊びの定義に当てはめてみると、①自由な活動→強制されず楽しみながら避難路造り。②分離した活動→阿部地域という空間でリスク化期後という災害のフェーズで行われている。③不確定の活動→不確定未来という災害の特徴で、展開や結果が分かっていない。④非生産的な活動→自主防災会の人たちはボランティアで、お金は生産されない。⑤ルールのある活動→ワークショップや避難訓練参加など、一時的にルールができる。⑥虚構的活動→災害という非現実特有の意識がある。このように、カイヨワの「遊び」の定義に当てはめることができ、「マイ避難路」作成において「遊び」の要素があったと考えられる。彼らは単に防災意識が高かった訳ではなく、災害への危機感や地域への貢献に加えて、退職後の楽しみや生きがいといった、いわば個人的な楽しみとして避難路造りにかかわっていた部分もあった。それゆえ、集落全体を性急に統合するようなことなくして、「マイ避難路」造りが進んでいった側面もあった。つまり、自由に個人的に活動を行うことができ、なおかつその活動に「遊び」の要素があったと考えられる。「マイ避難路」作成がうまく行われたのは、

こういった「遊び」が要因にあったのである。しかし、「マイ避難路」作成においては2ヶ月程度で大部分が作成されたように、一時的な活動だと考えられるので、第五章では持続的に行われている防災活動について記述する。

第五章 高齢者による「遊び」としての日常的な防災活動

南海トラフ新想定以来、阿部の人たちは、休校となった小学校のグラウンドにほぼ毎日集まって、散歩をしたり話しをしたりと交流するようになっていた。本章では、そのグラウンドに毎日自主的に集まって歩いている人たちを分析する。第一節では、グラウンドに集まっている人たちがどういった人たちなのか記述し、第二節でそれぞれの目的や背景について述べる。第三節では、グラウンドで歩いている内容（周回数、滞在時間）を詳しく記述し、第四節で、分析結果を総括する。

第一節 グラウンドに集う人々

8月25日～8月29日、9月25日～9月29日の10日間、徳島県美波町阿部で調査を行った。調査のうち9日間において、グラウンドに一番人が集まっていた夕方に、どういった人が集まり、どれだけの時間滞在しているかなどを調査した。表7は、グラウンドに集まって来る人がどういった人なのかを表している。表7を見て分かるように、グラウンドに集まっている人々は、80歳以上の独居もしくは高齢夫婦の女性が多く、運動能力については歩行時にシルバーカーやつえが必要な人が多い。現在も働いている人は、Xさんだけで商店の経営をしている（阿部で唯一の商店）。しかし、病気持ちで奥さんも87歳と高齢なのでいつ閉めるか悩んでいる。Sさんは、10月～5月の間に建網漁の手伝いを少しするくらいで、Zさんが今でもたまたま浅瀬で海女をしている。他の人たちは、何もしておらず、少し畑をする程度である。このように、独居で仕事も何もしていない人が多く、比較的自由な時間が多い人が集まっている。また、全員足腰に病気や痛みを抱えている人たちばかりで、シルバーカーを使っているQさんRさんTさんUさんVさんYさんは、避難の時に必ず助けがいる要援護者だと考えられていた。例えばQさんは、50代の時に脳の手術を行い、計4回手術を行った。寝たきりとなり、一時期植物状態にも陥った。それでも、自身の気力とリハビリで私生活ができるくらいまでに回復した。左半身マヒで最初はお茶碗も持てなかったが、自主的にテニスボールを握るなど、リハビリをして動くようにもなった。しかし、歩行器なしで歩くのは難しく、グラウンドに集まっている人たちの中でも運動レベルは低い方である。それでは、どうしてこのような歩くことが困難に近い人たちがグラウンドに集まったり、歩いたりしているのだろうか。次節では、それぞれの目的や歩き出した経緯などについて述べる。

	性別	年齢	家族形態	歩行器
Q	女	87歳	1人暮らし	シルバーカー
R	女	86歳	1人暮らし	シルバーカー
S	女	83歳	1人暮らし	つえ
T	女	83歳	1人暮らし	シルバーカー
U	女	88歳	1人暮らし	シルバーカー
V	女	88歳	1人暮らし	シルバーカー
W	男	88歳	1人暮らし	なし
X	男	86歳	2人暮らし	なし
Y	女	99歳	1人暮らし	シルバーカー
Z	女	81歳	2人暮らし	なし

表7 性別、年齢、家族形態、歩行器

第二節 各々の目的や背景

グラウンドに集まっているYさん（超高齢のため詳しい話しできなかった）以外の人たちは、全員昭和南海地震を経験している。津波については、Qさん「東北のあれやな、ほれまで地震や津波や恐ろしい思ってなかったもんなあ」、Sさん「津波はたたえてくる（津波が満ちていく）くらいやったからなあ、ほんな恐ろしいも思わなんだなあ」と話していた。第二章でも述べたように、阿部では昭和南海地震による津波で人的被害がなかったため、津波に対する意識がなかった

のである。そのため、グラウンドに集まっている人たちからも、同じような語りが聞かれた。しかし、2011年3月11日に東日本大震災が発生し、「東日本大震災の映像を見て津波のイメージが変わった」とほとんどの方が話していた。その後、南海トラフ巨大地震のデータは見直され、徳島県では2011年12月に国に先駆けて「津波高暫定値」が公表され、20.2メートルの津波が阿部に来襲することが分かった。Vさんが「当時（南海トラフ新想定聞いた時）生きとったおとうさん（夫）と、もう2人でダンスの中に入って流されような一話してたんよ」と話すように、諦めムードな人が多くいた。しかし、自主防災会の呼びかけなど（流されて探すのが大変）によって動き出す人がでてくる。死後まで迷惑をかけたくないという動機の人がほとんどであった。Qさんと妹のTさんが話し合い、逃げるために足を鍛えないといけないと考え、グラウンドで歩きだしたのが始まりである。同時期にSさんも歩き始めた。この3人が中心となり、高齢者の方がよく集まる、朝の墓参りやデイサービス（阿部の診療所で第二木曜日、第四木曜日行われている）で、RさんUさんVさんを誘ってみんなで歩くようになった。ほぼ毎日のように集まって歩いているのはこのQ～Vさんの6人である（写真5）。



写真5 グラウンドを歩いている様子

W～Zさんは、散歩をしている人や、健康のための運動をしている人、様子を見に来ている人など目的は様々である。例えばXさんは、一年程前に心筋梗塞によって倒れた。医者に体重を落とささいと言われ一日、3000歩4000歩を目安に歩いており、散歩でたまにグラウンドを訪れているのである。グラウンドに集まっているQ～Zさんは、それぞれ目的は様々であるが、一緒に歩いたり話したりしていた。また冬にはWさんを含め5、6人程度のメンバーがグラウンドゴルフをしている。この時期が一番グラウンドに人が集まる時期である。Q～Zさん以外にも、犬の散歩をしに来たり、おじいさんとお孫さんが遊びに来たりもしていた。このように、避難時の為の体力作りを目的としたグループと、健康の為や散歩などを目的としたグループの2つに分けることができる。しかし、目的は違う2グループであるが、一緒に歩いたり話しをしたりと交流していた。また、グラウンドの横の道を通りすぎる人と話しが始まったりと、それぞれ目的は違いますがグラウンドを中心として交流している場面が印象的であった。

このようにグラウンドが集いの場となった背景に、南海トラフ新想定発表と同時期の2011年3

月 16 日に阿部校が休校となり、自由にグラウンドが使えるようになったことが挙げられる。町中では、車の邪魔になったりと自由に歩けないので、気を遣わず好きな時間にグラウンドが使えることが良かったと話す人が多くいた。一般的には、休校や廃校となった学校のグラウンドは、草が生い茂ったりするが、阿部校のグラウンドはいつも綺麗である。調査をしている間、グラウンドを歩いている Q~V さんが歩いている途中で立ち止まり、長い草を抜いていたのがよく目にとまった。また、自主防災会の人コンバインで草を刈ったりするなど、グラウンドは地域の人たちによって綺麗に保たれていることが分かった。このように、阿部地域の老若男女の人たちが集まるグラウンドは地域の人たちにとって、重要な場となっているのである。

第三節 活動内容

グラウンドを歩いている人たちは、その日に何周するかは決めておらず、その日の気分で周回数を決めている。1 周約 300 歩で、1 周するのに 4、5 分程度かかる。休憩場所は、暑い時は木陰になっている所で、涼しくなってくると陽の当たりが良い所に移動する。実際に調査に行った 8 月と 9 月で休憩場所が移動していた (図 3)。雨が降ってくると校舎の玄関で雨宿りをしながら話しをする。休憩場所で使っている椅子は、瀬戸商店 (今はもうしていない) から持ってきたもので、椅子のマットは Z さんがお風呂のマットを切り取って作ってくれた (写真 6)。このように、彼女たちは気温や天気に合わせて、無理することなく自分のペースで歩いていた。

また、彼女たちは気温や天気だけでなく、各々の予定などにも合わせて歩いていた。例えば、相撲好きな人が多いので相撲の中継時間によって歩き始める時間を早めたり遅めたり調整していた。9 月の調査の時は、相撲中継をしている時期だったので 9 月 26 日~9 月 29 日の間は、S さんは相撲中継が終わってから 1 人で歩いていた。他の人たちは、相撲が始まる前に歩いていた。他にも自らの予定に合わせて早く帰ったりするなど、歩くことが 1 日の予定の中に組み込まれており、それに合わせて時間を調整していた。グラウンドで話していた内容は、阿部住民のこと、昔話、天気、年金の話題が主である。他にもその時に話題になっていることを話している (広島土砂災害、芸能ニュース、御嶽山、相撲など)。このように、訓練という名目であるが、自分の好きなように自由に歩いていた。歩くことによって以前より、足が動くようになった、体調や気分がいいという人が多くいた。

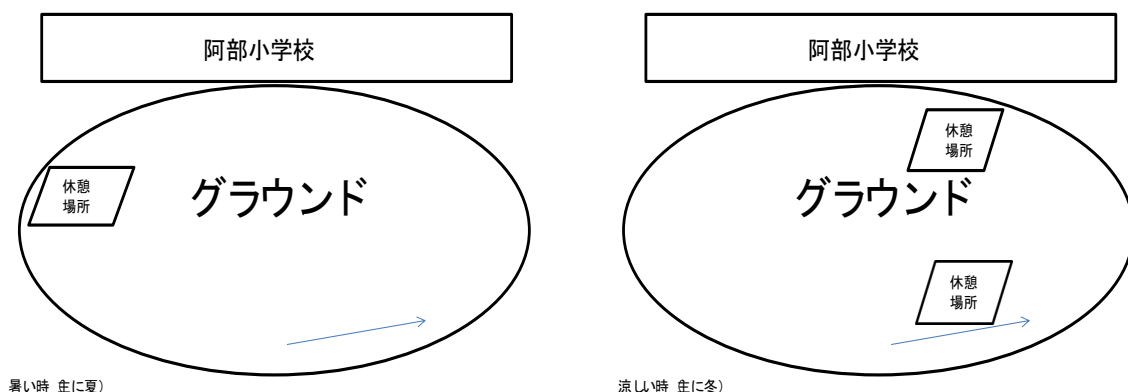


図3 休憩場所



写真6 休憩場所で話している様子

表8は、Q～Zさんそれぞれのグラウンド周回数、その日の参加人数と平均周回数を示した表である。Q～Vさんは訓練目的で歩いているので、ほぼ毎日のように続けて来ていて、周回数も比較的多い。しかし、W～Zさんは、訓練目的ではないのでQ～Vさんたちに比べばらばらで来ていて、周回数も少ない。このように歩く目的によって、周回数が違うことが分かる。しかしXさんに関しては、第二節でも述べたように、一年程前に心筋梗塞になり、体重を落とさないといけないと医者から忠告され、今年の一月頃から晩御飯後に歩くようになった。健康目的で歩きに来ていることや運動レベルがまだ高いことで周回数が多くなっている。9月の調査でも、0周になっているが別の道を散歩したりしていた。

表9は、グラウンドでの滞在時間を表している。時間帯は、15時～19時の間である。ほぼ毎日歩いているQ～Zさんは、だいたい1時間～2時間程度である。Wさんは、散歩のついでによく来ていたが、話だけをしてから帰ることが多く一緒に歩くことはあまりなかった。Zさんは、グラウンドで歩いている人たちの様子を見に来るのが目的なので、一緒に話しはするが一緒に歩くことはあまりなく、時間がくると帰宅する。ここでも、歩く目的が違うことで、滞在時間にも差がでてくることが分かった。以下からは、8月と9月に分けて分析する。

8月の調査では、暑い日がまだ続いていたのでUさんとVさんは体調を考慮して歩けていなかったのが2人も0周。Rさんも暑いとなかなか歩けないので、暑い時期は歩くのを休む時も多々ある。Tさんは、8月は阿南にいる長女の家だったので0周となっている。QさんとSさんが暑い時期でも毎日歩いている、雨が降ったりしない限り毎日歩いている。また、Sさんは糖尿病持ちでお医者さんから運動をしなさいと注意されたので、半年程前から1人で早朝も歩いている。9月21日～9月24日に行われていた阿部での祭りの時も毎朝歩いていた徹底ぶりである。最初はずつつえを使っていたが、今ではつえなしで10周もできるようになっている。

9月の調査では、気候も涼しくなっていたので西地区のUさんとVさんも2人で参加するようになっていた。UさんとVさんは、必ずグラウンドに来る時どちらかが声をかけて、一緒に来て

いた。Tさんも9月に阿南から帰って来ていたので、参加するようになっていた。Tさんも、お昼になるとよく姉のQさんの家に行くので、グラウンドに来るときは、2人一緒に来る時が多い。Qさんと妹のTさんは、もう少し涼しくなると昼も歩くようにしている。以上のように、ほぼ毎日歩くメンバーの中でもQさんとSさんが熱心であることが分かり、歩いている場でも2人が中心となっていた。歩いているメンバーの中では、運動レベルが低い方であるQさんが引っ張っている感じであったのが印象的であった。調査最終日の9月29日には、西地区の82歳の女性の方が様子を見に来ていた。その方は、8月に夫が亡くなり今は1人暮らしをしている。Qさんを中心に、「1人だと寂しいだろ？ででこなあかんでよ。一緒に歩こうないな」と誘っていた。それに対して「ほな明日から来るわー」と返していたので、新たなメンバーが加わりそうである。

9日間一緒に歩いていて、全員本当に楽しそうにしていたことが印象的であった。これが本当に訓練目的で行われているのかと疑問に感じる程であった。ほぼ毎日歩いているQ～Vさんの6人全員が口を揃えて、「みんなと一緒に歩いて話するのが楽しい」と話してくれた。集まって歩くことを苦に思っている人は誰一人いなかった。このことは、周回数と滞在時間にも表れている。8月に比べ涼しくて歩きやすい気候の9月になったにもかかわらず、周回数が少ないことに違和感がある。滞在時間にそれほどの違いがあるわけでもない。毎日歩いていたQさんで見ても、8月は最低でも6周しているのに対して、9月は最高が6周で2周の時もある。このように、集まる人数が増えると話す時間（休憩時間）が増え、周回数が減っていることが分かる。そのことが最も顕著に表れているのが、8月25日と27日の2日間と、9月26日である。前者の参加人数は3人で、平均周回数は8周である。それに比べ後者は、参加人数が7人で、平均周回数は1.8周である。大きく8月と9月に分けてみても、比較的参加人数の多い9月は、平均周回数が少ないことが分かる。また、8月28日Qさんが1人で歩いて休憩していた時、1人だと寂しそうにしていた。その後Sさんが来て、「遅かったでえ。待ったんでよ」と嬉しそうにQさんが話しかけ一緒に歩き出した場面も印象的であった。

このように、集まる人数が増えると、グラウンドはおしゃべりの場となっていることが分かった。上の節でも述べたように、歩く目的や経緯が違っていても、一緒に歩いたり話しをしたりと交流しており、毎日のように歩いているQ～Vさんを中心に、集いの場が形成されているのである。

	8月25日	8月26日	8月27日	8月28日	9月25日	9月26日	9月27日	9月28日	9月29日
Q	8周	7周	8周	6周	6周	2周	4周	4周	5周
R	8周	4周	0周	0周	6周	2周	5周	3周	5周
S	8周	6周	7周	6周	5周	2周	3周	3周	5周
T	0周	0周	0周	0周	5周	2周	4周	4周	5周
U	0周	0周	0周	0周	0周	2周	2周	3周	2周
V	0周	0周	0周	0周	0周	2周	2周	3周	2周
W	0周	1周	0周	0周	0周	0周	0周	0周	0周
X	0周	5周	9周	4周	0周	0周	0周	0周	0周
Y	0周	1周	0周	0周	0周	0周	1周	1周	0周
Z	0周	0周	0周	0周	0周	1周	0周	0周	1周
平均周回数	8周	4周	8周	5.3周	5.5周	1.8周	3周	3周	3.5周
参加人数	3人	6人	3人	3人	4人	7人	7人	7人	7人

表8 周回数

	8月25日	8月26日	8月27日	8月28日	9月25日	9月26日	9月27日	9月28日	9月29日
Q	2時間	1時間40分	1時間55分	1時間50分	1時間10分	1時間10分	1時間25分	1時間50分	2時間10分
R	2時間	1時間35分	0分	0分	1時間10分	1時間30分	1時間40分	40分	2時間5分
S	2時間	1時間30分	1時間30分	1時間50分	40分	10分	15分	15分	2時間5分
T	0分	0分	0分	0分	40分	1時間10分	1時間25分	1時間50分	2時間10分
U	0分	0分	0分	1時間50分	0分	1時間30分	1時間25分	1時間20分	1時間15分
V	0分	0分	0分	0分	0分	1時間30分	1時間25分	1時間20分	1時間15分
W	0分	30分	0分	10分	0分	10分	20分	25分	0分
X	0分	50分	1時間25分	30分	0分	0分	0分	0分	0分
Y	0分	5分	0分	0分	0分	0分	5分	5分	0分
Z	0分	0分	0分	0分	0分	1時間15分	0分	0分	40分

表 9 グラウンド滞在時間

第四節 小括：「遊び」としての防災活動

分析した結果、グラウンドに集まって来ていた人たちは、大きく分けると 2 つのグループに分けることができる。1 つは、避難時の為の体力作りを目的に歩いているグループ。もう 1 つは、前者のグループの様子を見に来たり、健康や散歩が目的のグループ。目的が違う 2 つのグループ間では、周回数や滞在時間に差があることが分かった。しかし、これら 2 つのグループは、目的は違うが一緒に歩いたり話しをしたりと交流していた。時には一言でもあるが、グラウンドの横を通りすぎる人も加わり、10 人近い人たちが交流する場面も見られた。また、地域の数少ない子どもたち、さらにその母親や祖父と交流したりもしていた。このように、様々な世代の人が集まり意見を交わし、自らの意見や行為に対して応答がある空間が形成されていた。これは、第一章で述べた、「複数性」が必要不可欠である「公共空間」に当てはめることができる。つまり、グラウンドを中心にアレント（1958=1994）の「現れの空間」が形成されていたのであり、自らの意見や行為に応答があることで、自らの存在を確かめることが自然とできていたのである。

体力作りを目的に歩いているグループの Q～V さんに、より焦点を当てて考察すると、全員 80 代の独居暮らしの女性で、歩行器なしでは歩くことが困難な人たちが歩いていた。一般的に考えると、このような人たちが持続的に活動を続けることは難しい。しかし、彼女たちはそれを 2 年近くほぼ毎日のように行っている。そこで、彼女たちの活動を「マイ避難路」作成同様、「遊び」の観点から捉える。第一章で述べたチクセントミハイ（1975=2000）の「フロー」概念は、対象に興味を持ち楽しさを感じその行為に没頭する状態のことである。この「フロー」概念の浅い状態のことを「マイクロフロー」概念とした。これは、日常生活の何気ない行為のことを指しており、「マイクロフロー」概念のような活動においても内発的報酬はもたらされる。以上のことから、本章で取り上げた高齢女性の取り組みは、「マイクロフロー」概念によって支えられているのではないかと考えられる。日常生活の何気ない行為（歩くこと）が、楽しみや喜びという内発的報酬がもたらされているのである。1 人で行うのではなく他人と行ったことで、話しをするという楽しみを見いだすことができたのが大きかった。周回数や滞在時間、そして彼女たちの会話や雰囲気から、初めは避難時の体力作りが目的であった歩くことが、今では日々の楽しみ（日課）となっていることが分かった。このように、災害の被害抑制を目的として意識的に行われた活動が、積極的には防災と考えられない活動（日常生活）、つまり日々の楽しみ（日課）へと変化したことが、持続的に活動が続けられた要因なのである。

第六章 まとめと考察

第一節 まとめ

本研究では、徳島県美波町阿部集落における住民主体の防災活動の事例をもとに、南海トラフ新想定が地域社会に与えたインパクトについて記述すると共に、防災活動の創出や持続可能性について「遊び」の観点から捉えてきた。第一章では、災害研究を人類学者が研究する意義について記述した。ハード面の対策だけではなく、各地域の「脆弱性」を低減させることで、災害被害を減らすことが可能である。また、「公共空間」形成において「見棄てられた境遇」のような問題のある「公共空間」がある。「見棄てられた境遇」とは、他者からの応答の可能性を失った「公共空間」であり、集まった人たちそれぞれに自らの意志がない状態である。その例として日本各地

の自主防災組織には、形と内実の乖離などの問題が生じており、防災活動においても持続性問題があることが分かった。そこで、木村（2006）のトルコでの研究例から、「遊び」が防災活動における持続性問題の改善へと繋がるのではないかと考え、本研究を進めてきた。

第二章では、昭和南海地震によって徳島県の南部地域では、多大な被害が生じたことが分かった。それに対して本研究の調査地である阿部では、津波も潮が満ちるのが早くなった程度で人的被害も無かった。阿部は、地形的な特徴によって昔から津波被害をほとんど受けてこなかった地域であり、過去の災害文化が住民の津波に対する意識の薄さの要因となっていた。つまり、このような負の災害文化によって、リスク化期前の阿部住民は津波に対する意識が無く、津波による「危険」は住民たちの意識の外に隠れ続けていた。

しかし、第三章で明らかにしたように、この潜在的「危険」は、東日本大震災や南海トラフ新想定によって、顕在的「危険」へと変化した。ここで初めて、津波が自分たちにとって「危険」な災害であることを認識した阿部住民であったが、これまで津波対策をしてこなかったことなどから、身動きがとれない状況、つまり「危険」な状況に陥っていた。

第四章では、その何も対策ができない「危険」から、何らかの対策ができる「リスク」へと変換された、阿部地域における「リスク化」過程について記述した。阿部では、行政の手が回る前から「マイ避難路」作成が行われ、地域住民によって「リスク化」が行われた。「マイ避難路」作成者に焦点を当ててみると、「マイ避難路」造りを苦に思っておらず、楽しみながら作成に取り掛かっており、「マイ避難路」作成が、楽しみや生きがいを生産していることが分かった。この「マイ避難路」造りは、カイヨワ（1958=1970）の6つの遊びの定義に当てはめることができ、「マイ避難路」造りがうまく行われた要因は「遊び」にあったことが明らかになった。さらに、この「マイ避難路」造りが多くのメディアに取り上げられたことで、今では様々な外部アクターと連携しながら防災活動が行われている。しかし、「マイ避難路」自体は、およそ2ヵ月で大部分が完成し、一時的な活動だと考えられる。

第五章では、独居暮らしの高齢女性による、2年近く持続的に行われている防災活動について記述した。彼女たちは、体力作りを目的にグラウンドを歩くことを、2年近くほぼ毎日のように行っている。しかし、調査を進めていくことで、最初は訓練目的で歩いていたことが、今では日々の楽しみ（日課）へと変化していることが分かった。結果的に、彼女たちは日常生活の中で持続的に防災活動を続けられていた。チクセントミハイ（1975=2000）の「マイクロフロー」概念のように、日常の何気ない歩く行為によって楽しみが生産され、そのことが持続的に活動を続けられた要因に繋がっていたのである。第四章の「マイ避難路」作成、第五章の高齢女性による避難時の体力作り、これら2つの防災活動を2種類の「遊び」の観点から捉えた。これらは同じ「遊び」ではあるがまったく違う性質である。前者の「遊び」においては、確かに楽しみや生きがいが生産されていたが、一時的なものであった。それに対して後者の「遊び」は、日常における何気ない活動のなかで2年近く行われており、持続性があった。持続的な防災活動を行うためには、このように日常の文脈の中に、埋め込まれたそこはかかない楽しみの要素が重要だったのである。

これまで述べてきた阿部の動きをまとめる。2011年3月11日に発生した東日本大震災では、社会にひそんでいた様々な亀裂が明るみになった。しかし、東日本大震災は、社会の脆弱性だけではなく、隠れていた地域や地域住民の強さや潜在能力も明らかにした。この点に関してテッサ・

モーリス・スズキ（2012）は、「非公式の生活政治」という概念を用いて説明している。

公式の政治制度の政策や政策の欠陥によって自分たちの健康や暮らしが脅かされていると感じている、地元のグループや地域社会が取る行動のことであり、自力で自分を守る作業に取り組もうとするものである。（テッサ・モーリス・スズキほか 2012:85）

このように東日本大震災では、住民自らが健康や暮らしを守ろうとする草の根の活動（非公式の生活政治）によって、地域社会の中に存在する公式の政治の欠陥を補う創造性やダイナミズムが再発見され注目された。阿部の防災活動の始まりも、そうした「非公式の生活政治」と言えるだろう。なぜなら阿部では、行政による対応が成される前に、人々が危険を感じ、住民たちだけによって「マイ避難路」が作成されたり、高齢女性による避難時の体力作りの取り組みが行われたからである。「マイ避難路」づくりをはじめとする阿部住民による「非公式の生活政治」は、その後行政から高く評価され、多くのメディアからも取り上げられるなど、様々な外部アクターとかわり防災活動が行われるようになった。この点において「マイ避難路」は、集落の人びと・地域外の集落出身者・行政・大学などを巻き込みながら、新たな防災活動を展開する、いわば地域の外部と内部を繋ぐ道なるものであった。このように、阿部の防災活動は「非公式の生活政治」から、行政などと連携して行われる「公式の」防災活動へと広がっていったのである。

第二節 考察：災害リスクが生み出す公共空間

阿部の防災活動は、行政をはじめとする様々な外部アクターと連携して行われているが、地域住民自らの意志や考えの基に連携や問題共有化が行われている。第一章でも述べたように、アレント（1958=1994）は、異なる価値観や意見をもった人びとが自分自身をあらわにし、言論と実践を展開する場こそ「公共空間」であり、その場を「現れの空間」とした。また、木村（2014）は、「現れの空間」概念の影響を受け、多様なアクター間の連携と問題共有化の動きを「公共性」と呼んだ。これらで重要なのは、他者とは異なるものとしての「自ら（who）」を維持しつつ、関係性を築いていけるかである。阿部では、行政や外部アクターと連携するにあたって、行政側の思惑通りに機械的に動くのではなく、自らの意志や考えの基、連携や問題共有化を行っていた。そこでは防災計画や事業を外部アクター側に丸投げするのではなく、また外部アクター側の思惑に統合・一体化されることなく、自分たちの地域の状況などをきちんと伝え、互いの要望に沿って関係性が築かれている。つまり、第一章で述べた住民と行政（ここでは外部アクターも含む）の繋がりである「共助②」の防災活動が阿部では行われており、他者とは異なるものとしての「自ら（who）」が維持されていた。この関係性は、自主防災会と行政や外部アクター間だけに見られたわけではなく、住民の自主的な活動にも見られた。第五章の高齢女性の活動のように、始まりは自主防災会の呼びかけにより始まった活動だが、彼女たちは今では歩くこと自体に「楽しみ」を見だし、日々の日課と捉え活動を続けている。自主防災会の監視があるわけでもなく、彼女たちは自分たちの考えや気持ちの基、持続的に活動を続け、結果的に「防災」活動が行われている。

このように阿部では、様々な人々や団体がそれぞれの意識や意図を持つ防災活動を行っており、災害リスクを契機に、「現れの空間」が形成されている。行政などによって強制・規制された組織や活動では、ただ指示を受け動くだけで自らの考えや意識がない。それでは他者からの応答がない「見棄てられた境遇」となってしまう。また、強制的な組織や活動からは、自らの考えが発言できにくいだけでなく、楽しさや喜びも生まれづらい。しかし、阿部ではアクター間で強制・規制は見られず、自らの意志や行為に基づいて活動が行われていた。つまり、阿部の防災活動には「見棄てられた境遇」が発生していなかったのである。そこでは行政、自主防災会、高齢女性などのアクターそれぞれが、多様な考えや意志を持って「公共空間」が形成されていた。この、ばらばらではあるが強制・規制されることなく、結果的に一つの目標に向かって活動が行えている「複数性」ことが、阿部集落における防災活動の特徴であった。ただそれは、もはや「防災」ではなく、日常の中に組み込まれた、そこはかたない楽しみの要素が含まれた活動に基づいているのである。

◎参考文献

愛媛大学防災情報研究センター、2012、「南海トラフ 巨大地震に備える」アトラス出版

Hannah Arendt, 1958, *The Human Condition*, The University of Chicago Press, (=1994、ハンナ・アレント、訳:志水速雄、「人間の条件」ちくま学芸文庫)

福島真人、2002、「ジャワの宗教と社会—スハルト体制下インドネシアの民族誌的メモワール」ひつじ書房

海南町史編纂委員会、1995、「海南町史上巻・下巻」徳島県海部郡海南町

関西大学社会安全学部、2012、「検証 東日本大震災」ミネルヴァ書房

権安理、2006、「ハンナ・アレントとポスト・ハーバーマスの公共論—社会学におけるアレー

- ント公共空間論の受容をめぐる一』『ソシオサイエンス』12
- 木村周平、2005、「災害の人類学的研究に向けて」『文化人類学』70/3
- 木村周平、2006、「暗い未来に抗して—トルコ・イスタンブルにおける地震とコミュニティ—」『文化人類学』71/3
- 木村周平、2007、「地震学・実践・ネットワーク—トルコにおける地震観測の人類学的考察—」『文化人類学』71/4
- 木村周平、2013、「震災の公共人類学—揺れとともに生きるトルコの人びと—」世界思想社
- 小松丈晃、2003、「リスク論のルーマン」勁草書房
- 栗原彬、テッサモーリス・スズキ、苅谷剛彦、吉見俊哉、杉田敦、葉上太郎、2012、「3・11に問われて」岩波書店
- Mihaly,Csikszentmihalyi,1975,*Boredom and Anxiety: Experiencing Flow in Works and Play*, San Francisco:Jossey-Bass Inc.Publishers, (=2000、M・チクセントミハイ、訳:今村浩明、「楽しみの社会学」新思索社)
- 牟岐町教育委員会、1996、「南海道地震津波体験談—海が吠えた日—」
- ニューメディア、2014、「(特集) 2014年—(放送を大きく変える) 展望」『Number』370
- Roger,Caillois,1958,*Les Jeux et les Hommes*. (=1970、カイヨウ、訳:清水幾太郎、霧生和夫、「遊びと人間」岩波書店)
- 齋藤純一、2000、「公共性—思考のフロンティア—」岩波書店
- 宍喰町教育委員会、1986、「牟岐町史」牟岐町
- Susanna,M,Hoffman,2002,*Catastrophe & culture*, (=2006、スザンナ・M・ホフマン、アンソニー・オリヴァー＝スミス、訳:若林佳史、「災害の人類学—カタストロフィと文化—」明石書店)
- 田中重好、林春男、1989、「災害文化論序説」『社会科学討究』35(101)
- 徳島大学社会調査実習 2012年、実習報告書
- 徳島県海部郡宍喰町総務部、1996、「南海大地震—五十年の記憶と教訓—」宍喰町
- 徳島県徳島地方气象台、1997、「徳島県自然災害誌」徳島県
- 徳島新聞社、2012、「徳島新聞」11月3日朝刊
- Ulrich,Beck,1986,*Risikogesellschaft:Auf dem Weg in eine andere Moderne*,Frankfurt am Main:Suhrkamp. (=1998、訳:東廉、伊藤美登里、「危険社会—新しい近代への道—」法政大学出版局)
- 山下晋司、福島真人(編)、2005、「現代人類学のプラクシス—科学技術時代をみる視座—」有斐閣アルマ
- 吉原直樹、長谷部弘、石沢真貴、庄司知恵子、後藤一蔵、菱山宏輔、松本行真、松井克浩、伊藤嘉高、2011、「防災コミュニティの基層」御茶の水書房
- 由岐町史編纂委員会、1985、「由岐町史」

◎参考 URL

阿部校 HP、2014年5月20日閲覧、

<http://www.abukou.minamicho.ed.jp/>
警察庁緊急災害警備本部広報資料、2014年7月16日閲覧、

<http://www.isobesatoshi.com/data/sisya-eastjapan.html>
国土交通省、2014年11月20日閲覧、

<http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/higai/higai-1995.html>
国土交通省気象庁、2014年11月23日閲覧、

<http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/higai/higai-1995.html>
内閣府 防災情報のページ、2014年11月22日閲覧、

http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h24/bousai2012/html/honbun/4b_8s_14_00.htm
総務省消防庁、2014年12月18日閲覧、

<http://www.fdma.go.jp/concern/publication/>
徳島県 HP 安心とくしま、2014年5月22日閲覧、

<http://anshin.pref.tokushima.jp>
徳島県の漁港、2014年11月25日閲覧、

http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KAN5/siryouko/naname/tokushima/komatsushima_gyoko.htm
徳島地方気象台、2014年11月22日閲覧、

<http://www.jma-net.go.jp/tokushima/nankai/nankaitop.htm>